こてぃすと　～祈りの調べ～

都々古 さぴ

「あ、爪切らな」

伸びかけの爪をパチパチ弄るクセが直らない。一日おきの爪切りを怠っていた。

昔から爪の切り方と箸の持ち方だけは「上手い」と母に褒められてきたが、他人に自慢できるわけでもなく、友達に言ってみても「へえ、そうなの…」と苦笑されるのがオチだった。

そんな私にも、爪切りと箸の持ち方以外に、おそらく特技と呼べるものができた。

日本の伝統楽器「箏」である。

「やたら横に長くて絃を弾くとポロンと鳴る」とかなんとなく想像がつくかもしれない。

長さはおよそ百八十～百八十五センチ。桐でできた本体には十三本の絃が張られており、絃に掛かった白いプラスチック製の箏柱で音程を調整、つまり調弦をする。

絃は演奏者から一番遠い低音側より順に、一、二、三……十と番号順に呼び、十一番目は斗、十二番目は為、十三番目は巾と名付けられている。

弾き方は、右手の親指、人差し指、中指に象牙製の箏爪をはめて演奏する。

ピアノやギターといえば一般的な音楽の習い事として捉えられているのに、金持ちの特権とでも思われているのか、私が箏を習っていると教えると「何故箏なの？」と皆口を揃えて尋ねた。「目にする機会が滅多にない＝難しいもの」という式でも成り立っているのだろうか。

お正月番組等で見かける、和装で正座をして静かに演奏という淑やかなイメージの影響からか、「大和撫子」や「お嬢様」というレッテルを貼られがちだった。

実際「音を出す」ことに関しては、箏は音程さえ正確に合わせてあれば、どれかの絃を鳴らしたら何かしらの音が出るので、とっつきやすい楽器ではある。

「盛り爪命」とかでなければ誰でもすぐに弾くことができる。

そもそも私が箏を弾こうと思ったのは、まだ大学に入学して間もない頃、構内で行われていた箏曲部のコンサートに目が留まったのがきっかけだった。

その場で体験演奏をさせてもらったり、新入生歓迎演奏会に参加するうちに、気が付くと他の新入生と一緒にいつの間にか入部していた。

初めは勉強の息抜きにと思っていたのだが、箏というものを知る度にどんどん深みにはまることになってしまった。

箏の楽器としての魅力を挙げるならば、三オクターブもの音域が出て、どんな音階でも作れるフレキシブルな楽器ということだ。

時に繊細に、時に力強く、弾き方によってさまざまに表情を変えられる。

そんな箏に魅せられた私は結局、大学四年間は部活に捧げたも同然の生活を送った。

当時は部活以外に、顧問の先生に個別レッスンを受けている部員も何人かいた。

レッスン料は一時間二千円とあって、習うつもりは毛頭なかったのだが、大学一年生の冬、同級生に「先生にマンツーマンレッスン受けたら、弾き方のコツがわかるよ」と勧められたので、一回だけなら――という心づもりで先生の家へ足を運んだのが長い試練の始まりだった。

「とっても指の練習になる曲」と差し出された楽譜が免状、すなわち修了証の課題曲で、先生の「あなたならすぐに取れるわよ」という呪文に、当時素直の塊だった私は何の疑いもなく熱心に練習に励んだ。

その後無事に初級免状を取得できたことで自信がついた私は、更に上を目指すべきという先生の勧めもあり、自身の腕を磨くためお稽古に通い続けることになった。

卒業したのが三年前だから今年で六年目である。

青春時代は箏一色だった私にとって箏は日課であり、生きる糧であり、家族の一員といっても過言ではなかった。

本当に今、一人身になって痛感していた。

「どうしたん？ワラビ」

私はくるりと後ろに振り返った。

「別に……」

テーブルで爪を切っている最中、背中に気だるそうな視線を感じると思ったら、ワラビがその円な眼で見つめていたのだった。

彼は視線を逸らすと、定位置である窓の隅っこに戻り身体を丸めて目を瞑った。

つれない態度なのは承知している。座椅子から立ち上がった私は彼の傍まで行き、よしよしと斑模様の頭を撫でた。

ワラビは一見したところ、耳が内側にカールした小さなトラだが、紛れもなくこの箏の精霊だ。

精霊なんて非現実的と思うかもしれないが現実である。

私がワラビと出会ったのは今から七年前のこと。

現在練習で使用している箏は、私の大叔母さんが若い頃使っていた楽器で、生を受けてから少なくとも半世紀は経っている代物だった。

箏は伝説上の生物、龍に見立てた楽器であるため、各部分は龍にちなんだ名称となっている。ざっくりわけると、演奏する側の先端部分を龍頭（りゅうとう）、反対側を龍尾（りゅうび）、頭と尾に挟まれている部分を甲という。

この箏は四十年近く使用しないまま、手入れもせずに放置に近い状況だったので、譲り受けた当初は甲にはホコリが積もり、絃はゆるゆるで黄ばんでいた。

とてもじゃないがそのまま弾けるわけがなく、本来の力を発揮させるために、箏屋さんで新しい絃に張り替えてもらい、カバー等の油単も新調した。

その記念といってはなんだが、箏に「ワラビ」と名付けた。その時無性にわらび餅が食べたかったからだ。由来はどうであれ名前があると愛着がわいてくるものだ。

修理された箏は新品と変わらないくらいピカピカになって戻ってきた。

（おお～これこれ。やっぱ演奏者たるもの、楽器も綺麗じゃないとな～）

と一丁前のことを思いながら、パッと箏を裏側に向けると円らな瞳がうるるん。

「うわあっ！」

たまげた私は箏を手放しそうになり、慌てて壁に立てかけた。

箏には音が反響するように、裏側の龍頭と龍尾には丸い穴があいているのだが、その音穴(おんけつ)から栗色の毛に焦げ茶色の斑点模様の猫、というよりはトラの子供に近いネコ科の動物がひょこっと首を出していた。

動物との触れ合いに慣れていない私は、とりあえず中から小トラを引っ張り出そうと試み、手を音穴に入れようとすると、すれ違うように小トラがスルリと抜け出てきた。

そして私の前にちょこんとおすわりした。

真ん丸な瞳と耳。長くてふさふさの尻尾。小さいわりには気品のある面構えだった。

彼はツンとそっぽを向くと、

「ああ、面倒なところに来てしまったな……」

外見に似合わぬハスキーボイスで喋った。

（トラが喋った！？）

仰天した私は額に手の平を当ててみた。

特別熱くはなく、平熱が三十六度に達していない低体温に変化はなかった。

私の慌てぶりとは正反対に小トラは落ち着き払っていた。

気付けば彼は部屋内をぐるりと一周していた。

「そうか、お前は精霊を知らないのか」

「せ、精霊？精霊って、お箏の？」

「そうだ」

「本当にいたんや……」

その時の私は恐怖におののくよりも歓喜に浸っていた。

小トラの話によると精霊は、動物、植物の生物だけでなく、人工物など全てのモノに宿る超自然的な存在で、長い年月を経ると生物の形になって現れることがあるらしい。

とそこで真っ先に思い浮かんだのが九十九神(つくもがみ)だった。

九十九神は器物に霊が宿ったものとされるので、正確に言えば箏自体に手足が生えて化けるべきところだが、どちらも人間の想像を超越した生物の類なので、だいたい同じニュアンスだろうと受け止めておくことにした。

おぞましい生物だったらともかく、こんな可愛らしい動物なら全然問題ない！と、心の中ではハイテンションになり、無言のままにやけている私を前にして、精霊のほうがたじろいでいた。

この精霊、人によっては全く見えない人もいるらしい。

霊感が強いわけでもない私が見えた理由はわからないが、わりと呑気な性格の私は猜疑心を抱くこともなく、すんなりとその存在を受け入れることができた。

この小トラには決まった名前はなかったため、ネーミングセンスのない私は箏の呼び名である「ワラビ」を採用することにしたのである。

今のところ私以外にワラビの存在を知っているのは、箏の師匠である橘(たちばな)先生だけだ。

先生にはワラビと出会ってから約一ヶ月後に詳細を話した。実際にワラビを連れていくと、小

動物好きの先生は彼を優しく撫でてくれた。

その時のワラビといったら、普段私には絶対に見せない愛嬌たっぷりな声で「にゃう～」と鳴いて先生に擦り寄った。

「可愛いわねえ」

ネコを被るワラビに彼女はすっかり騙されていた。

私は先生の膝で丸まっているワラビをじろりと見やり、処世術を知り得ている小憎らしい小トラに舌打ちしたくなった。

箏をドアにぶつけたり、箏柱を倒したり…等ぞんざいに扱ってしまうとすぐに辛辣な言葉を浴びせられたり、尻尾でペシリとはたかれたりするが、一人暮らしの私にとっては貴重な存在だった。

土曜日。この日は二週間ぶりの稽古日だった。

学生時代は週一で通っていたが、社会人になってからは隔週に減った。

社会人はレッスン料が二千五百円と、学生よりも五百円アップするので、経済的にもそのくらいがちょうどよかった。

お稽古は先生の自宅の一室で行われている。私の家から先生のお家までは、マヤショロ電車颪山(おろしやま)駅から電車で約五十分の道のりだ。

まず颪山駅から桜駅まで普通列車で約十五分、桜駅から特急に乗り煉瓦(れんが)町駅まで約十分。

そして、トーヨキ電車に乗り換えて約八分で都福寺(とっぷくじ)駅に着く。そこから東に向かって二百メートルほど歩けば無事に到着する。

今日もいつも同じルートでやってきた。

私は門扉横のインターホンをそっと押した。

「どうぞ～」

という明るい声がして勢いよく門扉を押した。

稽古日はだいたい開錠してくれている。私は玄関扉を軽くノックしてから引くと、奥から小柄な女性が小走りでやって来た。お師匠の橘(たちばな)未華子(みかこ)先生だ。

「こんにちは」

「こんにちは。寒いわねえ～」

先生は両手を擦り合わせながら稽古部屋の戸を開けてくれた。

八畳の和室の壁際には箏が二面、三味線が三丁立てかけてあり、楽譜やＣＤ，ＭＤなどの音源が詰まったカラーボックスが三つ、床には書いて消せるペン、タコ糸、色鉛筆、両面テープなどの小物が無造作に散らばっていた。

一応カテゴリごとにかためられているというものの、お世辞にもすっきりと片付いているとは言い難い部屋だった。六年も通っていると見慣れたものだが、初めてこの部屋に入った時には散乱具合にギョッとした。

一年に一回くらいは運がよければ、すっきり整った状態が見られる。けれども、それも一ヶ月

も経たないうちに元通り。

大学では箏曲部員の指導、自宅では生徒の稽古で日夜忙しく、丸一日かけて整理整頓をする暇など取れないのだろう。

現在のお稽古曲は、来月の演奏会に向けて昨年の十月から練習している『春一番』という曲だ。

今日で三回目の合奏となる。心浮き立つ春の情景を描いた曲で、私が箏、先生が三味線の二重奏である。

「あんまり練習できてないの。先に言っとくわ」

先生はにこっと笑った。

還暦目前というのに、若くて綺麗で可愛らしい女性だった。

「えへへへ……」

ばっちり練習できていない私も笑顔で返した。

私は壁に立てかけてあった箏を立奏台(りっそうだい)——木製の台に箏を置き、クッション付の丸椅子に腰かけた。

これぞ立奏形式というもので、箏のお稽古は必ずしも「着物に正座」とは限らない。

三味線は正座で弾く座奏が多いが、箏の場合練習では殆ど立奏で行う。

ただし、箏柱が龍尾寄りになる調弦が低い曲では「押し手」といって、左手で箏柱の左側の絃を押さえて音程を高くする際に、椅子から立ち上がって押しに行くには大変な時があるので、座奏のほうが弾きやすいこともある。

そうはいっても、座奏で演奏する曲も本番直前までは立奏での練習がほとんどだ。若輩者の私には立奏のほうが足が痺れず、長時間演奏できるのでありがたい。

『春一番』の調弦を取り終えると、

「お願いします」

ペコリとお辞儀をしてお稽古スタート。

はじめはどれだけ間違えようがとりあえず一曲通す。どちらかが止まっても、決して手を止めてはいけない。それが合奏時の暗黙の了解。あまりにも置いてきぼりの場合は途中でストップするが基本的に止まらない。

曲の流れを感じ取り、間隔を身体に染み込ませ、箏の音色を最大限に生かす——という高度な技巧ができるレベルならカッコイイのだが、生憎私は楽譜を一生懸命に追っていたり、絃(いと)間違いして慌てたり、それも曲が進んでも引きずっているからなかなか一発で決められなかった。

「あっ、ごめん」

三味線の合いの手が入る所で先生の音が消えた。

「考え事してたわ。あはははは……」

「……ははは」

私達は二人で一緒に笑った。

曲に弾き慣れてくると、ついつい他のことを考えてしまいがちだった。

ふっと「今晩何を食べようかな」とか雑念が湧いてきて、「あ、次どこやったけ？」あたふたとなることが多々ある。

集中しているはずなのにおかしいな。集中していないからそんな余計なことが思い浮かんでくるのか。いや、これは他のことも考えながら演奏にも集中できるという一種の卓越した能力だ。

先生がそうなのだから私も同じに違いないということにしておいた。

「スクイがだんだん速くなっていくわ」

「はい、気をつけます…」

スクイとは、絃をすくって弾く「スクイ爪」という奏法のことだ。

「琴音ちゃんはねえ、手はよくまわるけどキレイな音出るように研究しなきゃ」

「……はい」

ええもう重々承知しておりますと私は肩を竦めた。

楽譜通りに弾くことは六年間の鍛錬でそれなりにできるようになってきたが、音の質という点に関してはまだまだひよっこ。

頭ではわかっていても、どうやって心地よい曲想に近づけるのかが難しいから、こうかな、あ、やっぱりこうかな……と、しっくり感を求めて試行錯誤を繰り返している日々だった。

「でも、だいぶ良くなったよ」

（へへ……）

私は密かに照れた。

滅多に褒めてもらえるわけではないので、この一言を聞くと「もっと頑張ろう！」と張り切ってしまう。私のやる気の引き出し方は、褒めて伸ばす方式で間違っていなかった。

「白雪(しらゆき)ちゃんて子がね、習いに来てるの」

楽譜を初めのページに戻した先生は唐突に話題を変えた。

「はあ……」

「こてぃすと目指してるのよ」

「こてぃすと！？またえらい物好きな」

私は声のトーンを上げた。

物好きと言ったものの、先生の営業話術に乗せられたのだろうと大方予想はついた。

「こてぃすと」は漢字にあてると「箏術人」と書く。

この言葉から私が連想するのは、箏のほっこりエンターテイナー、あるいは箏の魔術師といった類のものだ。

箏のプロフェッショナルではあるが、箏演奏者とはまた別物である。

箏術(ことじゅつ)とは箏をさまざまな奏法で弾き、聞く者の心の有り様を変化させる、いわゆる幻術と呼ばれるものに近い。要は一種の催眠術である。

その術を後世の邦楽界の権威が目をつけ、豊かな独創性、創造性を備えた人材を世に送り出そうとして資格認定されたのが箏術人である。

認定当初は物珍しさもあってか、受験志願者数が全国の邦楽器研究生の半数以上にも上り、空

前の大ヒットとなるかと期待された。
　ところが試験は過酷で脱落者が後を絶たなかった。
　その大きな原因は箏とは無関係な根気のいる試験内容だったからである。
　第一試験が「瞑想」なのだから上達させようにもさせようがない。
　こんな世俗離れした試験ですぐに役立たない術を習得することは、決して容易ではなかったのである。
　箏の教師という職業でさえ全国では少ないのに、箏術人は更にマイナー資格の部類に入ってしまい、勧められるということはよほどの暇人かあるいは実力者くらいのものだった。
　それでも強いてメリットを挙げるならば「こてぃすと」資格は免状や資格と違い、どこの団体でもそれ一つで通じることである。
　箏には大きく分けて生田流と山田流がある。流派の中でも多くの団体が存在し、団体によって取り扱う曲の傾向や弾き方等に違いがある。所属が違っても合奏できないことはない。
　ただ、免状や資格の試験制度は各団体によって異なるので、別の組織に移行する場合、また一から取り直す必要があり時間もお金もかかる。
　その煩わしさを「こてぃすと」は一気に解決してくれる素晴らしい資格…
　現在は瞑想の修行は必須ではなくなったらしく、実技内容も取り組みやすいように変更されたと噂で聞いたことがある。
　そのため、箏で術を使う「箏術」よりも、技を繰り出す「箏技」のほうが意味合い的にしっくりくるということで、こてぃすとの使う「箏技」とか単に「技」と言うことが多くなった。
「こてぃすと」と平仮名表記なのも、術と技の両方の意味を含ませているためだという。
　箏技に変わったところで、認定基準が下がるわけではない。このような修行みたいな試験に臨もうとしているうら若き女子が若干不憫にも思えたが、自分の意志で決めたことなら大丈夫なのだろうとも思った。
「……若いなあ」
　一昨年ぐらいからか「若い」という形容詞を頻発している気がする。
　二十歳前後と今を比べてみると、お肌のツヤ・ハリ感は下降気味で体力も減退していた。
　精神は若いままでも二十代半ばともなると、きゃぴきゃぴすることに躊躇いが生じてくる。
「で、アナタは？」
　遠くを振り返る面持ちの私に先生が尋ねた。
「え？」
　すぐに趣旨がつかめなかったが話の流れから察した。
「……どうするつもりってことですか？」
　先生はうんうんと頷いた。
「せっかく資格とったんだし、ヒマなら挑戦してみたらどうかなって」
「げほげほげほっ！」
　ナイスタイミングで咳が出た。

わざとではない。たまに咽るのだ。
「資格」というのは免状の次の目標で、これを取得すると箏を教える資格を得られる。
私は一昨年の夏にその資格試験を受けて無事に合格した。約三十五万円の登録料を支払い、すっかり貯金がからっぽになってしまったのが懐かしい。
それにしても、彼氏と別れたからって「暇人」と決めつけるのはよろしくないような。
「う〜ん、ぼちぼちやっていきますよ」
曖昧に笑う私に先生は溜息をついた。
「んまあ、それでもいいわよ」
「お箏は好きですけど、それだけって勿体ないかなあって。て言うても、他に同じくらい打ち込めるものがあるわけじゃないんですけどね。なんやろう…この頃は癒しがほしいというか……」
「彼氏作ればいいじゃん」
先生はさも当たり前のようにあっさり言ってのけた。
「すぐにできるもんじゃあ……そもそも出会いがないです」
“出会いがない”というフレーズに現実味がありすぎて私は少し虚しくなった。
「職場は？」
私はふるふると首を横に振った。
「そうなの？まだまだ若いんだから焦らずにね」
「はい……」
先生に励まされた私は、ほんのちょこっとだけ希望を見い出せた。

翌朝、早速昨日のお稽古の復習をすることにした。
現在の住まいは一般的なマンションだが、午前十時から午後七時までは音を出しても良いとの許可をもらっているので、気兼ねなく思う存分に箏を弾くことができた。
（このメロディーライン、先生に盛り上がりが足らんって言われたなあ〜）
『春一番』は「ゆるやかに繊細に」という曲想で、頭の中ではイメージできているのに、私が弾くと鯱鉾ばってぎこちなくなってしまう傾向にあった。
練習四ヶ月目ともなるとほぼ完成に近付いたものだが、それでも気を抜くと一音一音にハリがなくなり、いい加減に聞こえてしまう。
素人なら音色を耳にするだけで「わ〜すごい！」と感じられる箏の音色。
エセ和風から脱却するためには、より弾き方にもこだわりたい。プライドという高尚なものでもなかったが、そこだけは妥協したくなかった。
「あ〜違う……」
自主練習時、心の声をうっかり口に出してしまうのも、もう恥ずかしくはなかった。
例え応えずとも聞いてくれている存在がいつも傍にいるから。
「うるさい」
こんな無神経ともとれる台詞は日常茶飯事。

「……ごめん」
　謝る必要はないのに、私はついつい正直に反応してしまう。
　ワラビは喜怒哀楽が非常にわかりにくい生き物だった。
　特に「喜」と「楽」に関しては感情を顔に出さないため、いつも空気を読むのに苦労していた。
　それでもこうやって長年一緒に過ごせているのは、心地よい距離感を保てているからだと思う。
　今のところ箏を弾いている時が一番幸せだった。
　一人になると、ふとした瞬間に思い出したくない過去が脳裏をよぎることがある。
　誰かに嫌味を言われたとか怒られた記憶なら、一時の不快感で終わっていくけれども、いつまでも続いて欲しい楽しかった思い出が蘇ると、なぜ失ってしまったのか、答えの出ない迷宮を永遠に彷徨えるほどに思い悩んでしまいがちだった。

　同棲していた元彼も箏を好きになってくれた。
　箏はポロンと掻き鳴らすだけではなくて、ハードな動きも装備されている楽器だと知った彼は、練習中にこっそり部屋に入ってきて「今のは心がこもってない！」等と、勝手に言いたいことだけ言って去っていくということが多々あった。
　二人暮らしをしていても、箏の練習時間は毎日必ず確保していた。
　私の日課でもあったし、箏に直向きな私を彼も好きだと言って応援してくれていた。
　彼が仕事で嫌なことがあった日も隣で励まして、美味しい物を食べて元気になってくれたら私も同じように嬉しかった。
　こんな日々がこの先もずっと続いて、近い将来家庭を持つんだろなあとワクワクしていた。
　そう、全ては順調だったのだ。ところが、その夢は儚くも消え失せた。
　同棲半年後に彼が突然「やりたいことに打ち込みたい」と言い出したのだ。
　夢を持ち、それに向かって努力する――それ自体は素晴らしいことだ。私も傍で支えるつもりだった。
　しかし彼は「やりたいこと」をいつかは生業にしたいから企業勤めを辞め、フリーター生活を送りつつ修行に励みたい、そうなると結婚時期もいつになるかわからないと話した。
　私ははじめこの人が何を言っているのか理解できなかったが、彼はハッキリこう告げた。
「自分のやりたいことが一番で、琴音との将来のことは頭になかった……ごめん」
　残暑が厳しい初秋、私の中で早くも木枯らしがひゅるる～と吹いた。
「でも好きなのは変わらんから、俺についてきてくれるなら一生愛するよ」
（そこで邪険に扱われる意味がわからん……）
　自分が生活するのにもいっぱいいっぱいなのに、他人を気遣う余裕があるものか。
　周りの友人達も今か今かと結婚報告を待っていたので、大学時代の親友の彩芽ちゃんに事の顛末をメールした時には「何それ！相手を支えられへんのに、自分は支えて下さいってこと？そんなんこっちから願い下げやわ！」とご立腹で、小中学校時代からの友人の法子からは「え～！そうなん？まあ、うちもフリーになったし。オトコってのは勝手なもんやね」と非難轟々のコメン

トばかりだった。
彼に思いを話された当初の私は泣いてばかりで、この先三十年分の涙はゆうに流してしまったと思う。
両親にも「結婚前提で同棲許したのに！」と特に父の彼への怒りは並々ならぬものだったようだが、彼の両親すら彼の好きなようにさせたら良いという考えだったので、固い信念を打ち壊すことはできず、穏便な話し合いの結果別れることになったのだ。
その後私は再び不動産会社へ行き、楽器の練習が可能な安い物件を探し、ようやく見つけたのが凪山に近いこの部屋だった。
職場までは自転車で片道三十分もかかるが、山々に囲まれた自然溢れるこの土地の空気を吸うと心が洗われるようだった。
引越ししてもう七ヶ月が過ぎようとしている。
ポトリ。
一粒の涙が箏の甲に落ちた。それは小さな丸い染みとなって消えた。
（ふうぅぅ〜）
私は溢れ出る涙を両手で拭き取った。
過去を思い返すと必ず出てくる涙。別れた当初は悲しみの表れだったものが、今では雑多な感情が混ざってよくわからないものになっていた。
ふにゅん。
と、腰辺りに柔らかいものがふれた。
振り返るとワラビが前足で私をそっと押していた。
（慰めてくれてるんか……）
「ありがと」
私の感謝の言葉にワラビは、
「濡らすな」
ぴしゃりと言い放った。
「はは、ごめんごめん」
拍子抜けした私はおかしくて笑ってしまった。
ワラビがいなければ私は今頃廃人と化していただろう。滅多に感情を表にあらわさないワラビだが、その言動は常に得てして冷静で着実だ。
傍から見れば可愛げが感じられなくても、気を遣わずに接することができる相手で、それもこれも箏のおかげだった。
もしかしたら生まれる前から箏に熱中する道を歩むのが決まっていて、その手助けに神様が精霊（ワラビ）を与えてくれたのではないかと、柄にもなく空想的な思考が働いてしまう時があった。
こんな「ザ・箏ライフ」を満喫している私だが、生活してゆくために平日五日間はきちんと働いている。
大学卒業後、私は就職したブラック企業を一年足らずで辞めてしまった。

その後は実家に戻り、バイトをしながら今後の進路を決めようとしていると、就職した元彼と京都で同棲することになったので、フルタイムではなくパートタイムの仕事に就いた。

パートとはいっても福利厚生は充実しているし、ボーナスもお小遣い程度には出るため、贅沢をしなければ、趣味で箏を楽しむには十分な収入だった。

（顔が冷べたい〜）

陽に向かって自転車をこぐ私の顔に凍える風がひゅうと当たる。

首周りにマフラーをきっちり巻いていても隙間から冷気が入ってくる。それでも直に風を受けないだけマシだった。

着実に季節は春に向かっているとはいえ、刺すような冷たさはいくら寒さに強い私でも堪えた。

朝はいつも午前八時前には自宅を出る。

勤務開始時間は午前九時からなので、会社には午前八時二十分頃には着いてしまう。もう少し遅くても余裕はあるのだが、早めに出たほうが交通量も少なくて心穏やかに通勤できるし、何よりもうこのスタイルに慣れてしまっていた。

大通りに出るまではずっと川沿いを走る。高い建物に遮られずに遠くまで見渡せるのは気持ちがいい。ただ、だだっ広い枯れ草原には味気なさも感じられた。

それは見渡す限り薄に覆い尽くされているからだ。

橋の上を通ってかろうじて水の流れを確認できるまでは、川含む一帯を草原だと思い込んでいた。

土手沿いには桜の木が植わっており、春になったら綺麗な花を咲かせるはずだ。

全国でも有名な観光スポットの嵐山。花見や紅葉の時期は特に観光客や宴会客で賑わうため、シーズンを想像しただけでその喧しさにゾッとしてしまう。

誰もが桜や紅葉の見頃の時期に観光地を訪れたいだろうが、止むを得ない事情で時期を逃してしまうこともある。見所は他にあったとしても一番期待していた華にお目にかかれないと、旅の印象も弱まり、たいした思い出でなくなる——

と、私も嵐山に住むまではそう思っていた。

しかし本当の観光というのは綺麗な花を観賞しに行くだけではなく、その土地の空気、景色、産物など総合的に見てこそ感じ取れるはずなので、冬の閑散期もまた一つの嵐山の顔として捉えれば趣があるように思う。

開花や紅葉を待つドキドキワクワク感は、脈あり片思い中の相手からの返事を待つ感覚に似ている。私はどちらかというと、最盛期よりも咲き始め色づき始めのほうが季節の訪れを身近に感じることができて好きだ。と言いつつ、多少の寂しさ感は否めないが——

自転車をせっせとこぎながら、こんなことをいつも心の中でぼやいていた。

職場の最寄駅モソシ駅から南に下っていると、スーパー、ドラッグストア、ファミレス、コンビニ、郵便局、銀行などが立ち並ぶ生活便利地域に入った。

道中舗装されていない険しい道を通ってくるわけでもないのに、風山からモソシ地区に来ると、その人通りの多さや建物の大きさに、山越えしてきた気分になる。

しばらくして「ハコツクール株式会社」と書かれた濃い緑色の看板が見えてきた。私は気合いを入れ直した。ようやく会社に到着だ。

当社では収納ボックスを製造している。衣装ケースなどの大きなものから、小物入れなど小さなものまで、近年は収納用品以外の生活雑貨などにも分野も広げ、その企画から販売まで一貫して自社で行っている。

商品は、大手通販会社やホームセンター、バラエティショップ等店頭販売がメインで、十年ほど前からはインターネットショップ事業にも取り組み始めた。

私は通信販売課で通販サイトの運営管理や、新商品のサンプルの組み立ておよび撮影を毎日六時間ほど行っている。地味ながらもそこそこ楽しい仕事だった。

「おはようございま〜す」

私は朝の低いテンションを少しでも上げるために、語尾を伸ばして明るさをアピールした。

「おはようさん」

ドアの近くで作業していた雁野さんが挨拶してくれた。

雁野友志（かりのゆうし）さんは四十代半ばの気のよいおじさんである。一年前に入社して以来、通信販売課、通称「ネット室」の長として受発注業務、企画、売り上げ促進等を管理している。

「ネット室」なんて時代の最先端をゆくカッコイイ響きだが、業界によって待遇は千差万別。

商品企画部と比べると、大手通販で売れ残った商品を格安で販売する「在庫処分課」という認識が拭われないままだった。

それが証拠に部屋も本社建物が立派なコンクリート造りというのに対し、その隣のネット室は工場の空きスペースに急遽作られた一室だった。

内装は白くて明るくてどの部署よりも清潔だが、所詮プレハブにすぎず、冬場の寒さは尋常ではなかった。特に床なんて、地面にフローリングもどきのシートを貼っただけなので、足元が冷えすぎて霜焼けは免れられなかった。

雁野さんが毎日朝一番に来てくれているおかげで、私が着いた頃には既に部屋が暖まっている。なんともありがたい。

彼は真っ青な薄手のブルゾンを羽織ったまま、商品サンプルの入ったダンボールを整理していた。

私が上着をハンガーにかけて席に着こうとすると、

「おはよーございまーす」

今日も覇気のない声でドアを開けたのは利根さんだった。

「ていっ」

彼は入口に置いてあるプリンタに乗っていたピョン—うさぎの抱きぬいぐるみを私めがけて投げた。

「ふにゃっ」

顔に直撃して変な声が出た。

机の上に横になったうさぎの耳を片手で持ちあげた私は、自分の席に着いた利根さんに向かってそのままぶんぶん振りまわした。

「こら～かわいそうやろ～」

「最初にぶつけてくるのが悪いんじゃないんですか～」

私はぬいぐるみを振りまわすのを止めて、元の定位置であるプリンタの上にそっと乗せた。

利根さんとは毎朝くだらない会話を交わしている。

利根真己（とねまさき）さん、彼は社内のシステム全般を担当している。

三十五歳、二児のパパだというのに精神年齢は私とほぼ変わらず。ピョンを投げつけてきたり、ポコンと膨らんだお腹で体当たりしてきたりと、色々ちょっかいを出してくることも多いが、親しみやすい人柄なので社内で唯一プライベートの深い話ができる相手でもあった。

「ちょっくら倉庫見てきます」

「いってらっしゃ～い」

雁野さんが部屋を出ていくと、上着を置いて戻ってきた利根さんがメガネを掛け直しながら、

「いい出会いはあったん？」

と挨拶感覚で尋ねてきた。

「あったらピョンに当たったりしてないですよ」

私はピョンのお腹をグーでぼすぼす押した。

利根さんには元彼と別れた経緯についても全て話していた。彼は気の毒そうにピョンを見つめていた。

「動物ぎゃくた～い」

「ただのぬいぐるみじゃないですか」

「つめたっ！」

「身も心も冷たいんです」

「ははは、そうかもね」

利根さんは思い切り肯定した。

冗談ではなく今は本当に心が冷たくなっていた。だからより温もりが欲しかった。

ピョンと戯れるのもそのうちの一つだった。

このピョンは三カ月ほど前にネット室にやって来た。

誰が持ち込んだかは定かではないが、社内の商品サンプル展示室に飾られており、関係のないものを放置しておくと、管理部長にどやされかねないという理由でここに寄越された。

何故ネット室なのかというと「撮影サンプルに使えるかも」と判断したらしい。未だ撮影に使用したことはなかった。

不要な物にも関わらず、処分するには惜しいと判断された物は皆ネット室に放り込んでゆく。

「また取りに来ます」と言ってくれる人がいても、約束を果たした人は今のところいない。

持ち主不明の不遇なピョンは、今やネット室の癒し系アイドルとして訪れる人々の心を和ませ

ていた。
　私と利根さんには振り回されたり、飛ばされたりと酷い扱いを受けているが、お互いにとって良いストレス発散の玩具には違いなかった。

　壁にかかった時計を見上げると八時五十五分だった。
「さあ、今日も仕事仕事〜」
　利根さんはやる気のこもっていない口ぶりでパソコンに向かった。
　私も正面に座り直し、朝のメールチェックをしようとした時ガラリと引き戸が開いた。
「おはようございます〜」
「おはようございます」
　脇に箱を二つ抱えたスリムな若い男性が入ってきた。
　宵蛍（よいほたる）ななしろまさんだ。
　確か私よりも一つ年上で、商品企画の仕事をしていたはず——私は記憶を手繰り寄せた。
　この部屋から出ることが滅多にないため、他部署の情報が人づてにしか入ってこなかった。
　ななしろまさんとは社内で何度か顔を合わせて世間話をすることがあり、かろうじて名前と顔は覚えていた。
　目鼻立ちがくっきりして、メレンゲ並のふんわり感と優しさを併せ持った爽やかな人である。
　妹だったら自慢の兄だろうなと思った。
　かっこよくて性格もよさげなメンズは印象に残りやすかった。
「撮影？」
　利根さんは椅子から立ち上がり、隣の物置ではなく撮影所に行こうとした。
　この部屋は三分の一が商品撮影用のスタジオになっている。
　スタジオといっても、デスクが並んでいる所を衝立で仕切っただけで、メタルラックやカラーボックスといった棚やソファ、椅子、折りたたみベッド等の大型家具がひしめき合っているだけだ。
　きちんと考えて配置すれば、通販カタログに載っている憧れのスタイリッシュな部屋が容易に撮影できるのに、ここに訪れる人々が他者のことを全く考えず、商品やサンプル小物を置いてきぼりにし、そこに更に先程述べた、他部署で余っている椅子や机など不要物なのに処分できないモノがどんどん蓄積されていくせいで、撮影スペースの半分は物置と化してしまっていた。
　そんなせせこましい所で、ななしろまさんは器用に写真を撮る準備をしていた。
「急にお客さんとこに送らないといけなくなったので。すぐに済みます」
「いや、ゆっくりしてっていいよ。なあ？弦葉（つるは）さん？」
「え？あ……はい」
　利根さんにいきなり名前を呼ばれてびっくりした私は適当に返事してしまった。
　ななしろまさんは床の上に白板を乗せ、その上に四角いカラーボックスに入る、取っ手付きのインナーケースを置いた。

白地にブラウンと濃いオレンジのチェックが、流行りの大人可愛さを演出していた。
「その箱おしゃれですね。チェック柄が」
「新作なんだ。気に入ったならサンプル返ってきた時一つあげるよ」
「わあ、ありがとうございます」
私は心の中でガッツポーズを決めた。
役目を終えたサンプル商品は再販売不可の場合、個人が持ち帰って良いものもあった。
「よし、終わり！」
早々とボックスの写真を撮り終えた彼は、その場を片付けて「失礼しました〜」と去って行った。
それを見送ったあと利根さんが、
「彼はどう？」
唐突に尋ねた。
「どうって……」
「弦葉さんとくっつける作戦やったんやけど」
「ななしろまさん彼女いますよ！」
多分、と心の中で付け加えた。
「な〜んや、残念」
利根さんはがっかりしていた。
「いなかったとしても社内恋愛はしたくないです」
「そうだよね〜」
あはは……と軽く笑っていた所にまたドアをノックする音がした。
「失礼しま〜す」
この愛嬌のある声の持ち主は珠崎歩智だ。
ななしろまさんと同じ部署で、私よりも一つ歳下の女子である。
「今日は朝から人多いねえ。どうしたん？」
「ちょっと探し物です〜」
背の低い歩智は小走りでスタジオの方に行き、何やらごそごそしていた。
「ついさっき、ななしろま君も来てたで」
「あっ、そうなんですか〜しろま先輩、今日もおしゃれでしたよね！」
歩智はキラキラした瞳で私と利根さんを見た。
「かっこええ人はどんなかっこしても似合うんやって」
私のこの抑揚感のなさに隣にいた利根さんが吹いた。
「それ言うたらおしまいやで」
「本当のことなので」
「でも、行里さんのほうがカッコイイですけどね〜」
歩智はほんのり顔を赤らめた。

行里さんというのは歩智の彼氏で、行きつけのパン屋さんで知り合ったとか。

なんともロマンチックな出会いである。歩智自身も、赤ずきんの格好をしていても違和感ないくらいメルヘンチック女子だと思っていたが。

のろけている彼女を見てか、利根さんはキリッと表情を引き締めた。

「弦葉さんも負けてたらアカンよ！」

「ええっ？負けるとかそんなんあるんですか！？」

「あるある。女の子は二十五……ギリギリ二十六歳までやで。それまでに見つけんと」

「それは利根さんの勝手な思い込みじゃないですか」

「いや、実はきちんとした統計に基づくもので一般的に女性の婚期は……」

いつものように彼が蘊蓄を傾けようとすると歩智が、

「弦葉さん彼氏いないんですか？」

真顔で聞いた。

「ええ、いや、まあ……」

私が口ごもっていると利根さんが、

「うん。募集中なん」

余計な情報を教えた。

「そうなんですかぁ！じゃあ、わたしの友達や彼の友達に良い人いないか聞いてみますよ」

「いや、無理せんでもいいよ」

「無理してないです！探してるなら任せてください。リストアップしてきます！」

「ああ…じゃあお願いします」

彼女の気迫に押されて、私は首を縦に振ってしまった。

「うちを好いてくれる酔狂な人なんているかなあ……」

「大丈夫です！弦葉さん可愛いし、お淑やかなのでモテますよ」

「ははははは」

あまりのべた褒めに私は空笑いしてしまった。

「それでは、楽しみに待っててくださいね！」

「はーい」

歩智はルンルン気分で部屋を後にした。

「良かったやん」

利根さんは私の肩をぽんぽんと叩いた。

「あまり期待できませんけど」

「なるようになるさ」

「そうですね……」

全ては神のみぞ知る。

私は希望二割諦め八割で待ってみることにした。

あっという間に時は過ぎ、気付けばレッスンの日。

今日も箏二時間、三味線一時間の計三時間、先生にみっちりしごかれた。

稽古が終わって外に出ると日が傾きかけていた。

寒いなあ……と私は両手に手袋をはめながら駅に向かって歩き始めた。

日差しはあってもまだまだ冬の寒気は健在だった。

視線を前に向けると、私と同年代くらいのカップルが歩いている。男は女の腰に手を回し、女は男の肩にもたれ掛かるようにして仲睦まじく喋っていた。

一人身になると、恋人同士の些細ないちゃつきでさえ嫌悪してしまいがちだった。

他人のことは自分には関係ないと放っておけばいいものを「私なんか……」と、どんどん貶める癖があった。

おそらく幸せの形の一つとしてずっと追い求めていたからだろう。

ようやくこうして落ちついてカップルを眺められるようになったのは、ある意味進歩だと思う。

理想を抱くのも結構だが、やはり現実を見据え、それに即した理想でないとただの妄想でしかないのだ。

自分にとっての幸せとは何かということをぼんやり考えているうちに都福駅に着いた。

私はカバンからごそごそと IC カードを取り出し、改札の青いマークに翳した。ピッという軽やかな電子音が鳴った。

シーズンオフということもあって構内はあまり混み合っていなかった。

タイミングよくやって来た電車に乗り、五分ほど揺られて煉瓦町駅に到着した。

次はマヤショロ電車の特急に乗り換えないといけないので、中央改札口ではなく東改札口方向に近い階段を目指した。私は少しでも運動不足を解消させるために、エスカレーターではなく階段を上り、再び自動改札機にピッとして改札口を出た。

煉瓦町駅は繁華街の地下駅で出入口が十ニ箇所ある。マヤショロ電車への乗り換えは地下道を通って行けた。

私は人の波に押されながら乗り換え口に向かっていると、

「やっと見つけた」

背後から静かだがはっきりとした声が。

振り返ったその先には、刺繍の施された黒ワンピースを着た長身の女性が立っていた。

歳は三十前後に見える。腰に届くほどの艶やかな黒髪に青紫色の瞳。鼻筋の通った美人だった。

「ずいぶん手間取ったけれど、これでようやく魔界に平和が訪れるわ」

「え？」

一人で勝手に会話を進めている彼女は、にこりと微笑んだ。

「あなたに罪はないけど許してね」

振り翳した右手が鈍く光った。

その人差し指と親指には長さ五センチくらいの鋭利な針が握られていた。

（えっ？）

本能的に身の危険を察知した私は乗り換え口ではなく、一番近くの二番出口に向かって一目散に走り出した。
彼女は針を手にしたまま、通行人の間をすり抜け追ってきた。
（何！？あのお姉さん！）
私は全くわけがわからないまま階段を上がった。
地上に出られれば近くのお店に逃げ込めると思いきや、途中でボコンと跳ね返された。
「わっ！」
尻もちをついた床には弾力があった。
ゴムみたいなポンポン弾んで落ちつかない足場に困惑していた私に、
「無駄な抵抗はやめなさい」
いつの間にか女性が私の正面にまわりこんでいた。
キョロキョロと周りを見渡したが、通りゆく人々は私が見えていないかのように何事もなく普通に歩いていた。
「あ、あなたは誰なんですか？」
「教える義理はないわ……でも、あなたもある意味被害者だものね」
「被害者？」
「そうよ。消えてもらわないとこっちが困るのよ！」
彼女は冷ややかな目つきで右手を振り上げた。
「わっ！」
私は咄嗟に両手で頭を覆った。
（あれ？何も起こらん？）
恐る恐る目を開けた私の目の前には、細身の男の人が立っていた。
「お前は……！」
彼女は険しい表情で彼を睨みつけていたが、何か事情を悟ると表情を和らげた。
「まあ、エリアは特定できた。今日はここまでにしてあげるわ」
と言うやいなや、すうっと姿を消した。
それと同時に周囲がぱっと明るくなり、足元も硬いコンクリートの地面に戻った。
「大丈夫？」
「ああ、はい……」
私は見上げた途端息を飲んだ。
端正な顔立ちに透明感のある肌が眩すぎたからである。歳は三十過ぎくらいだろうか。
グレーのスーツをぴしっと着こなし、髪は今時の若者風にばっちりセットされ、耳にはキラリと輝くマリンブルーのピアス――うちの職場では知り合うことすらできない、まして街で見かけても、田舎女子の私など視線を合わすことすら畏れ多い部類の人だった。
唖然としていた私はふと違和感を覚えた。
（ヘンな感じ……）

いや、それもさっきの女性と一緒で、理解不能な出来事が続き、しかも急に美形が現れたから一時的に思考回路がイカれてしまったのかもしれない。

と思い直した私は、遅ればせながら彼にお礼を言うことにした。

「ありがとうございました。よくわかりませんが助かりました」

「君にとったら全てがそうだろうね」

「？」

「ひとまず外に出ようか」

私は頷いて階段を上がった。

常日頃から「知らない人にのこのこついて行ってはいけない」と母に電話やメールで散々注意されているのに、成り行きで初対面の人と喫茶店に入り、紅茶をおごってもらい、のんびりとティータイムを伴にしているのは不思議な光景だった。

目の前に置かれたミルクティーからは湯気がもくもくと立っていた。

「さっきは危険な目に遭わせてごめんね」

「いえいえいえ……！」

いきなり謝罪された私は首と両手を横にぶんぶんと振った。

当事者はあの女性の方で彼はいわゆる恩人だったからだ。

（でも、待てよ。あのお姉さん、このお兄さんのこと知ってる口ぶりやったし……まさかグル？）

彼女の去り際の台詞から推測するに、単なる恩人ではなさそうな気もしてきた。

私が渋い顔になりそうなのを抑えようとしていると、

「まだ名乗ってなかったね、僕はメルフィーユと言います」

穏やかに自己紹介をしてくれた彼に、私はハッと我に返った。

「私は弦葉琴音（つるはことね）です。ええと、ごく普通の社会人です」

簡易ステータス付きに彼は「ふふっ」と声を出して笑った。

「ありがとう。僕は天界の神に仕える使いの一人。ここまで見透かされていたかな」

「いや、それは初耳です。『使い』っていうのも知らないです。明らかに一般人とは違うオーラやったので、特殊な人なんかなと感じただけで」

「やけに冷静だから、事情を上手く呑み込めてるのかなって思ったんだよ」

「気心知れた人以外の前では、はしゃぐことって滅多にないので……」

私は口ごもった。

このぎこちなさ加減が鉄面皮をかぶっていると思っている人も多かった。

けれどもそれは全くの見当違いで、私のペースより周りがはるかに速いがために、反応にタイムラグが生じてしまうだけだった。別におっとり構えようと意識しているわけではない。

ペースの基準は人によって違うだけのことだ。

とは言え、円滑な人間関係を築くには会話のテンポも大事なので、マイペースを維持しつつ、是非の反応は即座に示すよう心がけていた。

メルフィーユの口にしていることは、空想的で通常なら俄かには信じがたい話だった。

しかし、ここ風山で暮らすようになり、無意識のうちに自然と触れているせいか、人為ではない事物が現れてもすんなりと受け入れられていた。

自分が住む世界以外のことなど、これまでの人生で真剣に深く考えたこともなかった。考えたところで実際訪れることはできないし、それ以前に異世界は架空の存在と思っていたからだ。

だから信憑性を判断する前に、気になったことを質問することにした。

「天界ってどういうところなんですか？」

彼は白いティーカップに入ったコーヒーを一口飲むとソーサーの上に置いた。

「神と使いが住まう世界だよ。この世界には大きく分けて天界、地上界、魔界の三つが存在するんだ」

「魔界まで……小説やゲームでは聞くけど、本当に存在するなんて」

「天界と魔界を行き来することは容易じゃないけどね。地上界へも……過度の干渉は避けるようにと言われているから」

「言いつけを守るなんてえらいですね。私の勝手な想像ですけど、天界も魔界も秩序とは無縁の世界と思ってました」

「統制されてるんだよ。天界は統べる神を中心に各分野における神々がいて『使い』という者達が仕えている。魔界には魔王を中心に『フレリ』という管理組織がある。天界の使いと同じようなものだけど、使いと違うのはフレリの中には上下関係があるということかな。フレリのトップをハナと呼ぶんだ」

「へえ～使いって言われないと、人間と見た目変わらないですよね？」

彼はふっと顔を綻ばせた。

「これは仮の姿さ。地上界に下りる時は、人間らしい見た目に変えられるんだよ」

「人と使いの見分けがつくんですか？」

「どんな姿になっても、その使いが持ってる気配でわかるよ」

「ほおお～」

私は感心してしまった。

自分の計り知れない所で世界が動いているということを改めて実感した。

「ところで、あの女の人は誰やったんでしょう？向こうはうちのこと知ってるようでしたけど」

「彼女はフレリの一人、紗佐。地上界で暮らす使い達を探している」

「使いは天界で暮らしているんじゃ？」

「地上界にも何人かいるんだよ。そして君は使いの子なんだ」

「え？うちのオトンとオカンは人間……」

突拍子もない発言に私は動揺した。

「今の君自身は人間の父母から生まれたけれど、そこに使いの魂が入っているんだ」

「魂が入る？使いって人間と同じように生まれてこないんですか？」

私は衝撃を受けながらも平常心を維持しようと尋ねると、一瞬彼の表情が曇ったように見えた。

「使いはまず魂が生まれた後に体が形成されるんだ。誕生後約一週間は、魂と体の分離が可能な状態だから天界で育てられないといった場合、体ができる前に魂を地上界に送ることがあるんだよ。その一つが君のお母さんのお腹に宿って君が生まれてきたというわけ」
「そうやったんか……」
　何だかもう完全にファンタジー要素満載だったが胡散臭さは微塵もなかった。
「天界では人間のこと何でもわかるんですね」
「未来は予知できないよ。人間より長く生きている分知ることが多いだけ。情報収集も仕事のうちだからね」
「仕事？」
「使いは神と人間とを繋ぐ存在。神の許可を得て人間に転身もできる。そうして地上界に下りた元使い達と接触して今の人間の様子を探ったり、情報収集もしてるんだ」
「じゃあ、すれ違う人の中に実は元使いって人もいるかもしれへんのか、ふ〜む……転身した人はいいとして、私みたいに間で別の魂が入ってる人達って、普通の人間の生活を送ってるんですか？」
「殆どがそうだけど、魔物は使いが地上界で暮らすのを嫌うんだ。それが人間の中に宿る魂であってもね。彼らは憎しみや悲しみなど負の感情に人間を引き込み自滅させる存在。その逆に位置するのが天界だ。フレリ達は、元使いや使いの魂を宿す人間が地上界で生活すると正の力が強くなりすぎて均衡を保てなくなるといって、地上界の使い達を探し出しては片っ端から天界へ返すように仕向けているんだ」
「抵抗したら？」
「強制連行か消されるかだね……ちょっと手荒いけど」
　彼は涼しい顔で説明した。
　ちょっというかだいぶ手荒いのではないか。私含め何も知らない人間なら、慌てふためいて当然だろうと思った。
「初めて聞いて不安になっただろうけど、それを防ぐために僕が来たんだ」
　彼はまっすぐ私を見た。
「あ、ありがとうございます」
　私は思わずお礼を述べてしまった。
　きっとこの人が紗佐や魔の手から守ってくれるのだろうと、ぽわーんとしていたがそれも束の間だった。
「とは言ったものの、事情があって四六時中傍で見守ることができない」
　彼は申し訳なさそうな顔をした。
「そうなんですか……」
　私は少し気落ちした。
　少女漫画的な展開を期待した自分を情けなく思った。
「使いの魂が入った人って、自分で使いってことに気付けるんですか？」

「自覚している人もいれば、天界から使いが伝えに来て初めて知る人もいるよ」
「お父さんやお母さんが来てくれることも？」
「いや、それはあまりないよ。自分の子に会ったら連れ戻したくなるから、なるべく無関係な使いが来るんだ。知らせに来る目的は天界に戻るか、地上界に留まるかを選択してもらうためさ」
「う〜ん、天界に憧れはあるけど、地上界での生活を選ぶかなあ……今の生活をパッと捨てられやんやろし」
「まあ、大半の人はそう答えるね。だから魔物から身を護る術を身につけないといけない」
「それはどうやって？私は運動神経悪いし……」
「大丈夫」
　彼は懐から何かを取り出し私に手渡した。
　乳白色の綺麗な石だった。
「これを持っていると魔物が寄りつかない」
　ひんやりすべすべ感が妙に心地良かった。
「この石は天界でしか採れなくて、天界の要素が詰まっているから魔物は苦手なんだ」
「地上界に送ってくれた時に一緒に入れてくれたらよかったのに」
　私はぼそっと呟くと彼は笑った。
「体内に石が入ったら大変なことになるよ」
「あ、ああそうか……」
　私はてっきり籠に入った赤ちゃんを想像していた。
　魂がふよふよした形のないものだとしたらオマケは付けられないのかと悟った。
「それに、こうやって意思を訊くのも大切なことなんだよ」
「意思？」
「魂を宿す人間で、使いとして天界で暮らしたいっていう人もいるからね。稀だけど」
「その方が安全なんかな……」
「今までと全く違う環境にはじめは慣れないと思うよ。天界の生活も楽じゃない。むしろ地上界よりも制限があるし、それを破ったときの罰則も厳しい」
「ストイックに生きたい人には向いてるんですね」
「間違いじゃないね。僕としては今まで通り地上界で暮らしてほしいと思ってる。フレリは石を持っている使いは、使いとしてみなさず危害を与えることはないから」
（なあんや。この石があれば平気なんか）
「たまに例外もあるけど、その時はなんとか護るよ」
　最後に不安を煽る補足説明があったが、私には該当しなさそうだったので適当に聞き流しておいた。
　私は一通り話を聞き終えるとふうと吐息を漏らした。
「なんで天界で育ててくれやんだんやろ」
　私は少し残念だった。

自分自身の魂ではないけれども、どんな理由があったにしろ、見捨てられた感じも否めなかったからだ。
「二人の間に余程の事情があったんだと思うよ」
彼は優しい眼差しを向けた。
派手やかな見た目に対し柔らかな物腰に緊張感も解れていた。
「その……魔物ってやっぱり夜に出現することが多いんですか？」
「陽の光が苦手だから暗闇を好むけど、地上界ではあまり関係ないかな」
「あの紗佐って人も日中来てましたもんね」
「知能の高い魔物は魔力である程度は防御できるからね」
（魔力か……）
短時間で次々と現実に置き換えないといけない単語が出てきて、脳の処理スピードが追いついていかなかった。
それを察してかメルフィーユは細かい説明はしなかった。彼は窓の外に視線をやった。
「暗くなる前に帰らないとね」
「そうですね」
窓ガラスに移った景色は、次第にきらびやかなイルミネーションに移り変わっていくところだった。
「貴重なお話どうもありがとうございました」
「ううん、こちらこそ。気をつけてね」
柔らかな微笑みに心がキュンとなった。
嬉しいような恥ずかしいようなそんな気持ちだった。
私は彼に挨拶をしてから喫茶店を後にした。

勤め人にとって休み明けというのは憂鬱になるものらしいが、私には全然関係なかった。
自由時間が多すぎても結局だらだらしてしまうだけなので、適度に労働しないと身体のリズムがおかしくなるのだ。まあ、激務をこなしていないからそんな甘っちょろいことが言えるのだろうが。
だからといって、休日は昼まで寝てテレビ見て一日終わるというのも悲しいじゃないか。
などと心の中でぶつくさ言いながら帰る支度をしていた。
壁掛け時計をチラリと見やった利根さんが、
「もう帰るん？」
わざとらしく尋ねた。
「はい」
手短く答えた私に彼は眉をひそめ、プリンタの上に乗っていたぬいぐるみのピョンを掴み取ると、
「か・え・れ！」

ピョンの短い手をしっしっと追い払うように動かした。
私は無言でピョンの腹にグーで一発お見舞いしてやった。
「わあ～ひどいなあ。ま、今更驚かんけど」
「心が荒んでるんですよ」
腑に落ちなくても私は今の心境を隠さなかった。
「荒んでるって……ははは」
彼はわざとらしく笑い出した。
「俺はめっちゃ幸せやから、この幸せをわけてあげたいくらい！」
「はいはい」
「つれやんなあ。雁野さんも毎日楽しいですよね！」
話を振られた雁野さんは怪訝な顔をした。
「ぜんっぜん！」
「え？なんで？」
「寝ても、明日仕事か～って思うもん」
「わ～荒んでますね。よかったね『スサ友』ができて」
利根さんはすっかり笑いのネタにしていたが、
「そんな友達いらんわ」
とあしらう雁野さんに私も全く同感だった。
「でもねえ～人の不幸を喜ぶより、幸せを喜んであげられる人になりたいやん？」
「今、不幸なんをめっちゃ笑(わろ)てましたやん」
「笑うと喜ぶは違うんやって。気分だけでも明るくないとやっていけやんよ。はっはっは～！」
「カラ元気ですね」
「そうそう、それ！」
この部屋の人々は性質は違ってもどこかしら荒んでいた。
会社という組織に所属する以上は、何とかやるしかない的な一種の希望と一種の諦めが入り混ざっているものなのだと思った。
「ではお先に失礼します～」
「お疲れさん」
「また明日ね～ん」
二人に手を振られて私はネット室を後にした。

トボトボトボ。
いや、こんな寂しげな足音は大げさすぎる。私はてくてくと駅まで歩いていた。
今日は昼から雨が降ると、昨晩天気予報士のおじさんがテレビで伝えていたのを信じて疑うことなく電車で来たのに、ちっとも降る気配がなかった。所詮予報に過ぎないが何だか損した気分だった。

交通費を支給されているのだからケチるなよというご指摘は最もだが、電車に乗ろうが自転車をこごうが所要時間に大差ない。

乗り換えという曲者がなければ毎日優雅に電車通勤だが、一駅のために乗り換え、大きなカバンを引っ提げた女子学生達の五月蝿いおしゃべりを至近距離で聞く不愉快さを考えたら、自転車のほうが数倍快適で健康的だった。

会社からモソシ駅までの約十分の道のりは自転車だとあっという間なのに、徒歩だとそこそこ遠く感じる。

コンビニの前を通り過ぎると、「おでん」とやたら大きく主張された三本ののぼりのせいで、おでんが食べたくなってきた。でも一個百円もするなんて高すぎると思い辛抱した。

それに購入しても食べる場所に困る。駐車場で一人もそもそとちくわを頬張るのか。想像しただけでみすぼらしく残念な気持ちになった。

おでん食べたい妄想をしているうちにモソシ駅に着くと、タイミング良くやってきた普通電車に乗った。

桜駅に着き地下の階段を下りて一番線へ向かった。通勤ラッシュにはまだ早い時間なので人の数はまばらだった。

颪山行きの電車は、桜駅から終点颪山駅まで約十二分間でつないでいる。

行ったり来たりを一日何十回と繰り返しているのだ。

この時間帯の車内は学校帰りの学生や、主婦と思しきスーパーの袋を提げたお年寄りの女性、豹柄のスパッツを履いたおばちゃん等、所謂ビジネスパーソン層ではない人々が中心を占めていた。

私はドアに近い長椅子の端っこに座った。妙に空いていると思ったら、反対側の窓ガラスに「優先座席」というイラスト入りのシールがぺたりとくっつけられていた。

辺りをグルリと見回したが、優先すべき者が見当たらなかったので安心して深く腰掛けた。

ジリリリリ！！

出発のベルが鳴った。必要以上に急かされるレトロなベル音に耳が痛かった。

プシューッ！と扉が閉まりゴトンゴトンと電車が動き出した。

商店街や住宅地の風景が次第に山々に移り変わってゆく。

終点の颪山に着くと、他の乗客達は少しでも暖かい空間に滞在しようと最前車両に向かって進んでいたが、私は面倒だったので手前のドアから降りた。

ぶるり、と冷えのためか急に尿意を催してきた私は改札を出る前にトイレに立寄った。

この駅のトイレは奥まったところにあるので、数回利用したことがあっても曲がる所を間違えそうなくらいわかりづらい位置にあった。

トイレから出てきて手を洗いに行くと、隣の洗面台に黒い服に長い黒髪の女性が――

（あっ！）

私は反射的に洗面台から離れた。

女性はクルリと顔をこちらに向けた。

「待ってたわ」
　不気味なほどキレイな笑顔のお姉さん。紗佐だ。
　美人のこの台詞に野郎どもなら即骨抜きにされるだろうな……と悠長に構えている場合ではなかった。
　駅中のトイレとは大抵人が行き交うものなのに、観光地の閑散期ともなるとトイレの利用者数も少なくなるせいか、誰も来る気配がなかった。
　彼女は私がトイレに来るとわかっていて待ち伏せていたのかと、出没原因を突き止めるよりもどうやって逃げるかが先決だった。
「今日は大人しくしてくれるかしら」
　じりじりと詰め寄る紗佐に私は例の石をポケットから取り出した。
　彼女は一瞬動きを止めたが、何事もなかったかのように薄ら笑いを浮かべた。
「敵意はないっていうことね。でも、そういうわけにはいかないの！」
　カッと目を見開いた彼女は右手を大きく振り上げた。
「ひゃっ！」
　私は左肩すれすれで針をかわしたが、すぐに二発目が来た。
　その時「やめろ！！」とよく通る声がした。
　出入口に白い人が佇んでいた。
（誰や？あれは…）
「メルフィーユさん？」
　私はきょとんとした。
　顔を凝視すると間違いなく彼だった。ところが、この間会った時とは雰囲気がガラリと変わっていた。
　さらさらした銀髪をふんわりと一つに結い上げ、服装も白とグレーがまざった色のジャケットにスリムタイプのパンツ、履物は編み上げハーフブーツという、ほどよくカジュアルな装いに度肝を抜かれた。
　更に背中には大きな白い羽が生え、麗しさがより一層増していた。一般の人がイメージする典型的な天使の羽に近いだろう。
　儚げで優しい光を纏った形容しがたいオーラを放っていた。
「そ、そんなに驚いた？」
　まじまじと見つめている私にメルフィーユは意外そうだった。
　私は感謝するよりも抗議した。
「この石効きませんよ！」
「それは……」
　彼が口を開きかけると、
「いつもいいとこで邪魔が入るわね」
　舌打ちした紗佐はふっと微笑んだ。

「その石は単なるお守りよ。低級の魔物なら目にすることすら怯えるけれど、私には通用しないわ」
（じゃあ、うちって「例外」に当てはまってるやんか）
一体どういうことなのかと彼に問い詰めようとしたが、複雑な表情の顔を目にして口を噤んだ。
「何故執拗に追うんだ？」
「それはこの子が一番良くわかっているんじゃないのかしら？」
「え？」
「地上界に下り立った時から辿る道が決まっていたことよ。少なくともこの数十年を何日かで覆すなんてできないわ」
私は紗佐の言っている意味が全く理解できなかった。
しかしメルフィーユは反論もせずに黙って彼女を睨んだままだった。
「さて、お話はこれくらいにしてさっさと終わらせましょうか」
彼女の手に握り締められた針が再びキラリと針が光った。
当分裁縫箱は開けられそうにないかも……と危機に晒された私は周囲に異変を感じた。
辺りにもくもくと白い霧がたちこめてきた。
それはだんだん深くなり紗佐の姿も隠してしまった。
「小賢しいことを……」
彼女は私の姿が見えないのか狙いを定めかねていた。
「早くこっちに！」
出入り口の方でメルフィーユが私を呼ぶ声が聞こえた。
私は慌てて走り出し差し出された手を取った。その途端霧が晴れ視界が開けた。
前後左右を見回すと改札口を出た広場だった。
（ファンタスティック！！）
異世界から舞い戻ってきたかのような体験に、思わず両腕を左右に大きく広げてしまった私。
左斜め前にいた苦笑気味のメルフィーユに気が付くと恥ずかしくなり、即座に腕を下ろした。
彼はスーツを着た人間の姿に戻っていた。
人前では使いの姿にはならないようだ。どちらかといえば元の姿のほうが好きだった私はしょぼくれそうになったが、のんびりしてはいられなかった。
「紗佐はこうなることが予想ついてた言い方でしたけど……」
私は彼を見上げた。
「彼ら魔物は人の心の動きが読める。だからどんな行動をとるか察しもつきやすいんだろう」
「心の動きって、憎んだり妬んだりする心？」
「一度沸き起こった感情は簡単には消えない。彼女達は君の進む道もある程度予想していたんだと思う。目には見えない闇の領域と隣り合わせだったんだ」
目に見えない力は良い方向に導くものだけではなかった。
確かに殺人を犯した人が「一瞬魔が差した」と動機を語ることがあるように、光と闇は常に傍

にあるというよりも人の心の中にはどちらもあり、感情に左右されて占める割合が変化するものなのだろう。

私はやるせない気持ちになった。知らない所ですでに決められていたことなら、この先生き残れるどの選択肢を選んでも結果は同じなのだ。

「運命」というものが存在するのならば呪いたいくらいだった。

私は大声で「私の幸せを返して」と無性に叫びたかった。それがたとえ間違えだとわかっていても、なぜか涙があふれ出てきて止まらなかった。

好きな人と一緒にいたい——ただそれだけの願いなのに叶わないもどかしさ。

私は求めすぎたのだろうか。わがまますぎたのだろうか。

自問しても出るはずのない答えに悶々とし、感情なんてなかったらよかったのにとさえ感じてしまった。

ひどく困惑している彼に私は顔を合わせられなくなった。

「すみません……帰ります」

私は彼の隣を通り抜けて帰路を走った。

帰宅してから外に出ることは滅多にない。

というのは日が落ちると住宅地には明かりが灯るものの、東側の河原沿いにはノーライト、ノー人通り、変質者すら無暗矢鱈に歩きまわれば吸いこまれそうな漆黒の闇が広がっていたからである。

そのためかマンション入り口にある二台の自動販売機の光が神々しく感じられた。

私は先週から新商品として陳列されている冬季限定の「イチゴ大福風ドリンク」がどうしても気になったため、意を決して外に出ることにした。

スウェットズボンを脱いでジーンズにいちいち履き替え、ダウンコートにマフラーも装着して百円玉硬貨一枚、拾円玉硬貨二枚をしっかり握りしめて部屋を出た。

寒い。午後六時半をまわった頃だろうか、辺りはまだ薄暗いが空気はどんどん冷たさを増していた。

私はさっさと自販機に向かい、小銭を入れてお目当ての百二十ミリリットル「イチゴ大福風ドリンク」のボタンをピッと押した。

ゴトンと落ちた缶を取り出し、熱い缶のフタを開けて一口ごくん。

美味い。甘すぎずくどすぎずマイルドなお味。でも大福はどこへいった。これでは、ほんのりイチゴ風味を付けただけの餡ジュースだ。

まあ、あくまでも「イチゴ大福風」と謳っているので本物とは異なっていても詐欺ではないし、固体を液体にしたからといって本来の味を保持できるとは限らなかった。

残りをぐびぐびと飲み干した私は、風呂上りのおっさんのように「ぷは一っ」と一息ついて自販機横の空き缶入れに捨てた。

（散歩しよかな）

身体も温まったことなので私は河原沿いを少し歩くことにした。

夕暮れ時の風景もまた趣があるものだ。

駅から南に下っていくにつれて叢の占める割合は大きくなる。

その西側に自転車歩行者道というコンクリートの道が南北に走っており、入り口と車道のところに一本の木が立っていた。

枝先には薄黄色の真ん丸い小さな実がポコポコついている。

（へえ〜ここだけ……）

枯れ切った木々草々ばかりの中、この実のなる木は一際目立っていたと同時に、実の他にも目を引く看板があった。

「この道路は河川の増水時は危険なので通行を禁止します」

（河川、増水？）

とても増水するようには見えなかったというか、水が流れているのすらわかりにくい場所だった。大雨が降ったらきっと洪水被害が出るほどになるのだろう。

薄その他草花で覆われた土地には不釣り合いな看板を堪能した私はＵターンした。

するとどこからかリリリリ――と細かく小さな音が聞こえてきた。

こんな季節に鈴虫は鳴かない。楽器の練習音にしては小さいし、サイレンにしては弱弱しすぎる。

リリ、リリリリ――

どこかで耳にしたことがある気もする。鈴に似た音はどうやら雑草方面から鳴っているようだった。

疑問を残したまま立ち去りたくなかった私は、発生源を確かめるため土手を下りて薄の中をゆっくり進んだ。

その最中絶えず鳴っていた音がぴたりと止んだ。

（あれ？）

右足を一歩進めた瞬間、

「ひゃっ！」

ザザザ〜ッ！ボテン！

土の上に落っこちた。

（痛てててて……）

手入れなど全くされていない叢にまさか落とし穴があるとは思ってもみなかった。

重たいお尻を上げてなんとか立ち上がった私はジーンズについた土を払った。

どうやらここは単なる穴ではなく、どこか別の場所に繋がっている洞窟のようだった。

明かりがないはずなのにほのかに青白く光っているのが不気味だった。

立ち往生していると、またどこからか「リリリリリ――」と鈴の音が連続して響き出した。

その音はまるで風に乗り洞窟の奥へと誘導しているかのようだった。私は音を標に歩みを進めた。

五分ほど歩くと片開きの扉が目に入ってきた。扉の中央には梵字っぽい文字が円状に彫られていた。扉から先は行き止まりで道はない。

引き返すわけにも行かず、私は勇気を奮い立たせて扉をノックした。

誰もいないのか反応はなかった。取っ手を回し扉を手前にゆっくり押してみると中は洋風の居室が広がっていた。

鮮やかに目に映ったのはダマスク柄の緋色の絨毯。ステンドグラスで出来たレトロなペンダントライトの光が部屋を温白色に照らしていた。

隅にはアンティーク風のテーブルとイス、その右隣には黒い背表紙の本がズラリと並ぶ棚が二つ。書斎とリビングを兼ねたような部屋だった。

何の変哲もない一室を見まわしていた私。

が、突然左手首にパシッと硬いものが巻きついた。黒々と光る長い紐――ではなく髪に私は慌てて左方に振り向くと、

（髪！？）

紗佐がほくそ笑んでいた。

「あなたから来てくれるなんて探す手間が省けたわ」

「ちょっと！これは何なん？」

必死に髪を外そうともがく私に今度は首にまで髪を巻きつけてきた。

「く、苦しい～！」

私は右手で首に巻きついた髪を解こうとしたが、どんどん強く締め付けられるだけでびくともしなかった。

こんなわけわからん死ぬ方をするなんて……と意識が朦朧としてきた時、

「そこまでにしろ」

という声がかかり髪の毛がするりと抜けた。

私はその場に倒れ込んだ。

「げほっげほっ……あ～死ぬかと思った」

苛立ちと恐怖を覚えながらも体を起こし、声の主の方に目をやった。

紗佐の背後からソファに腰掛ける人の姿がぼんやりと現れた。

見た目は二十代半ばくらいの青年。黒髪黒い瞳で目つきが鋭くクールな印象を受けた。

彼は肘掛に肘をつき、気だるそうに足を組んで座っていた。

上質のファー付きフードが目を引く黒のモッズコートに、黒のデニム素材ズボン――と暗色の服装からして彼もまた魔物の一人であることがわかった。

彼は凍てつく眼差しを私に向けていた。

「久しぶりだな、龍月（りゅうげつ）」

椅子から立ち上がった彼は私の前までやって来ると、後ろで控えていた紗佐が眉根を寄せた。

「龍星（りゅうせい）様、なぜここで始末なさらないのですか！？」

「いきなり会ってすぐってのもなんだからな」

龍星と呼ばれた男は口元に冷笑を浮かべた。
「それに……」
「わっ！」
彼は私の首を掴むと、目にも止まらぬ速さで向かいの壁にぐいと押し付けた。
「くっ…」
細身の体からは想像できないほど強い力。
私は彼の腕をがしっと掴んだ。まるで氷に触れている感覚にぞくりとした。
「こうするのが手っ取り早いだろう」
ぐっと締める力が強くなった。
「……うちは龍月なんかじゃない。あなたも知らん」
この訴えで相手がすんなり納得してくれるとは思っていなかったが、やられる前に間違いを訂正しておきたかった。
「お前は知らなくても魂は覚えている。紗佐、針を」
「はい」
紗佐は手にしていた銀色の針を龍星に差し出した。
昨日追われた時に刺そうとしていたのと同じものだった。
「恨むなら父を恨め」
彼は右手を思い切り振り上げた。
その刹那、バコン！と破壊音が響き渡った。
「何事だ？」
私は力が緩んだ瞬間にぱっと手を払い除けた。
扉の方に向かうと丸い耳の一匹の大きなトラが――
「ワラビ？」
「早く乗れ！」
私は驚愕しながらも言われるままにワラビの背中にまたがった。
「そうか……面白いことをするな」
後ろを振り返ると龍星が低く呟いた。
「お前は必ず消し去ってやる」
睨みつけられた私は何も言えず、ワラビの背に乗って穴から脱出した。

地上に抜け出ると辺りはすでに真っ暗で、東の空には月が顔を出し星々がうっすらと輝いていた。河原沿いには外灯が一つもないので見渡す限りの闇だった。
向こう岸は車も頻繁に通り、並にライトアップされているのに対岸は閑散としていた。
（こんなところに一人って危ないよな……）
今更ながら現実を知ると身体が震えてきた。
ワラビとともに部屋まで辿り着くとそのままベッドの上に伏した。

横目で彼を見るといつの間にやら元の大きさに戻り、お行儀よくお座りしていた。
「大きくなれたんや」
「自力でというわけではない」
「どういうこと？」
「奴の力だ」
「奴？」
ワラビは窓際に近寄ったので私はむくりと起き上がった。
彼はふとベランダを見やり呟いた。
「適任者が来ている」
「適任者？」
私も窓際まで行きカーテンを開けると、
「わっ！」
ベランダの片隅に人影が映っていた。
ひょこりと姿を見せた彼は自然に微笑んだ。
「メルフィーユさん？」
ベランダにいる理由よりも先に、ここに上った手段の方が気になってしまった。
天界で暮らしているだけあって、彼にとっては三階の高さまで飛ぶことは、ウォーミングアップ程度にすぎないのだろうと推測しておくことにした。
「と、とりあえず中へ。あ、靴は、脱がんでもいいんですよね……」
「慌てなくてもいいよ」
「あ、いやいやいや！慌ててはないです……」
誰が見ても慌てているのは明らかだった。
天界に住まう使いが凡人の狭い部屋に入ってもらうのはなんだか気まずく、何より恥ずかしかった。
挙動不審な私に対してメルフィーユもワラビもいたって普段通りだった。
「す、座りますか？」
「いや、壁にもたれてるほうが落ち着くからここでいいよ」
「あっ、そうですか……」
私は何故こんなにも萎縮しているのか。
「隅っこっていじめられっ子かい！パシーン！」と仲良しこよしの間柄なら確実にノッてくれそうなお笑い芸人のツッコミなど恐ろしくてできなかった。
私はとりあえずピンクのカーペットの上に正座した。
ワラビは箏の前にちょこんと座ったので、三人の位置は三角形を描く形にになった。
「こんなに畏まられると話しづらいなあ……」
たじろぎながらもメルフィーユは、
「少し長くなるけれど…」

ゆっくり瞬きをしてから語り始めた。
「その昔、神様の伝言でこっそり魔界に赴いた使いがいたんだ。でも魔物に見つかってしまって……危機に瀕していたところを、とあるフレリの女性に助けられ、その出会いをきっかけに二人は次第に仲を深め、数年後には子供にも恵まれたんだ」
「使いと魔物のカップルってことですか？」
「うん。使いと魔物、異種同士が結び付くことに対しては両界では黙認されている……けど、嫌悪する者達が多いから、異種の子供が生まれると通常は一方の世界で育てるか、子の魂を地上界へ送り、人間としての生を歩ませるかのどちらかを選択しなければいけないんだ」
「家族一緒に暮らすのが一番やのにできへんなんて」
「生活環境も影響するからね。魔物は天界に住めないし、使いも魔界に住めない。だから片親と暮らすのが普通なんだ。子供は住んでいるうちに適応してくるから。彼らの場合は娘の魂を地上界へ送ることに決め、魂を抱えた父親は地上界へ向かったんだ」
「そんなことしたら子供に会えなくなるんじゃ……」
「そう。魂が人間に宿れば、本来の姿の娘には二度と会えないだろうということを彼はわかっていた。だから直前になって心が揺らぎ、妻に相談するためもう一度魔界へ赴いたんだ。けれども運悪く他のフレリと出くわしてしまって……フレリは彼と彼女の関係を知るなり、子の魂を消し去るかそれができないならば、直ちに地上界に落とせと脅迫した。彼らは泣く泣く魂を地上界へ送る決断をした」
「消し去るってそこまでせんでも。非情な生き物や……」
「フレリは国を担う魔物の模範的な存在だから。更に彼女はハナという要職に就いていた。それならば責任を追及されるのは当然のことだよ」
「そんな……」
見知らぬ世界にも関わらず、難儀であることは理解できた。
「娘の魂を送った後二人が会うことはなく、彼は天界で我が子の幸せを祈りながら神に仕える日々を送った。その数年後、風の噂で妻が病に伏したと聞き、その原因を密かに調べ始めたんだ。人間と違い天界や魔物は病気にはならないから……」
「その頃からだったな。魔穴（まけつ）が再び使われるようになったのは」
黙っていたワラビが唐突に口を開いた。
「魔穴？」
「今から六十年ほど前に、天界と魔界で過去に争いがあった際に魔物が作った穴だ。近付くと体内エネルギーを吸収される。現在はその効力はないが天界にいくつか残っている」
「地上界にもね……」
今度はメルフィーユが言葉を続けた。
「嵐山一帯が魔穴に包囲されている」
「この辺りが？」
「別に珍しいことではない。魔穴は各所に存在している。魔窟は別だが」

「魔窟？」
「さっき君がいたところ。簡単にいうと魔窟は魔穴より大きい物のことで、魔力を蓄えられるから一時的に魔物が棲みつくことがあるんだ」
「……あんな近くにキチガイが？」
「すぐ傍にあるように見えるけど、見えるだけで実際はもっと遠いんだ。滞在方法があったとしても体質的に使いや魔物にとって、地上界は暮らしづらいのには変わりはないから。それに魔物は特に、地上界の精霊達が警戒して受け入れないよ」
「えっと……つまり、人には見えへん何かの力で、向こうも易々と手を出せないってことですか？」
「そういうことになるね。龍星はお兄さんでもあるし」
「お兄さん？」
「そう、龍星と龍月は父違いの兄妹。でもって龍月は君のことだよ」
「へ？」
　私は思わず気の抜けた声を出してしまった。
　使いの子の魂が宿っていると知らされた時でさえ仰天したのに、更に使いと魔物のハーフだったとは……私自身は器を貸しているにすぎない人間だが、彼女の背負っているものは重すぎやしないか。なぜよりにもよって私のところに……？
　ごちゃごちゃになってきた脳内を整理するためには、近所迷惑になろうとも声を上げるしかなかった。
「え～っ！？」
　五秒遅れの私の叫びに、一人と一匹は表情を変えることはなかった。
「驚くのも無理はないと思うけど、これが事実なんだ」
　演技では有り得ない彼の緊迫した面持ちに、まだ信じがたい部分があった私は納得した。
　話だけでなく実際に魔物に出会い、攻撃をしかけられたことからも、生きていれば人知を超えた計り知れない出来事に遭遇する確率もゼロではないからだという結論に達したからである。
「龍月が地上界に送られる前に彼は娘、つまり君が地上界でも幸せでいられるように祈りを捧げた。人間が神社でお願い事をするのと似たものだよ。唯一違うのは、天界で祈り続ける限りは必ず叶う絶対的なものであること」
「必ず叶う幸せの祈り……」
「頭の良い君ならもう察しがついてると思うけど」
「え？全然！新しいことばっかりでついて行くのに精一杯です」
　彼は私が理解できるように噛み砕いて説明してくれているのだろうが、飲み込むのに多少時間がかかった。
「幸せと感じる時は色々あるけれど、君にとっては愛情を注げるものに触れているときが一番のようだね」
「愛情を注げるもの……箏ですか？」

私の問いに彼はコクリと頷いた。
「そうですね。箏は大事やし、恋人がいても同じくらいの位置を占めますから」
「上手くバランスを保っていたおかげで、その音色で魔界を脅かすことはなかった、七ヶ月前までは」
「箏の音色が魔界を脅かす？しかも七ヶ月前って元彼と別れた頃……」
「長年付き合った人との別れは深い悲しみをもたらしたんだろう。その感情と箏の音色が共鳴し合った結果、魔界にまで影響が出るようになってしまったんだ」
「なんで魔界に……あ、うちの中に龍月がいるからか」
私は言いかけると彼は悲しげな瞳で頷いた。
「そもそも地上界に送る魂に祈りを捧げたのが間違いだった」
「どうしてですか？」
「異世界では能力の働き方が変わってくることもある。天界で絶対的な力を持つ祈りは地上界では魔の力に引き込まれやすかったんだ」
「天界の人達は現状が見えてるなら、子供の将来も見通せないんですか？」
「ある程度の予想はついたとしても、将来どういったものに興味を持つのかまではわからないよ」
「不幸な人生を歩むとわかっているなら、まず地上界に遣らないだろう」
それまで黙っていたワラビが口を挟んだ。
「まあ、そうやけど。箏の演奏が原因で魔物達が苦しんでるのは何とかせんとアカンよなあ。弾くの止めたら解決するかな……」
「そんなことできないだろ」
ワラビが瞬殺した。
「そうやな……はは」
心の拠り所をおいそれと失うわけにはいかなかった。
「龍星に関しては、母を救うためなら君を消しかねない」
「それが最も手っ取り早い解決策だからだな」
ワラビはメルフィーユを見上げると彼は困惑した面持ちだった。
「銀の針か……」
「あの二人が持ってたやつ？あれで解決するんですか？」
「魔界はね」
彼は息をスウと吸った。
「地上界に住まう使いだけに効く銀の針。魔界に大中小の三本ある。この針に刺された者は全ての能力と記憶を失う」
「記憶？全部消されてしまうんですか？」
「身体以外は全て……抜け殻になる」
私は背筋に悪寒が走った。
あんな小さい針でこの二十数年の人生を失うなんてまっぴらごめんだ。

「心配要らないよ。そのためにワラビもいる」
「えっ？」
「今までのことを説明して、君の護衛ができるように力を与えておいたんだ」
「物分かりの良い精霊ですね～」
　ワラビはぷいとそっぽを向いた。
　いつの間にか、この愛想のない精霊が私を守るために協力してくれていたのだと思うと、にやけてしまった。
「で、どうする？」
「針にも刺さったらアカン、箏もやめれへんとなると……」
　私はう～んと考え込んだ。
　負の感情と共鳴する音色、負の感情がなかったら？
「負の感情をなくす？」
「無理だろう」
「……うん」
「せめて減らすくらいにしろ」
「そやな」
　私達のコントのようなやり取りにメルフィーユはくすりと笑った。
「心が穏やかであれば音色も変わってくるかもしれないね。訓練が要りそうだけど」
「訓練？こてぃすととか？」
　どうして急にその単語が思い浮かんできたのかはわからない。
　ただ「訓練」、「修行」と聞き、真っ先に思い浮かんだのと、何か役に立つのではないかと浅はかな脳みそは判断したのである。
「しばらくは僕やワラビがついているから」
　頑張って修行に励めということか……私は複雑な心境になった。
「魔界に聞こえてる音って天界でも聞こえるんですか？」
「キレイな音色がね」
　私は少し照れくさくなった。
　お世辞でも褒められると嬉しいものである。
　その反面、魔界では騒音にしかなっていないということがわかると両手を上げて喜べなかった。
　心地良い音とそうでない音の区別は実にわかりやすい。
　騒音と一口にいっても、車の異常なエンジン音、バイクの暴走音、度を超えた音痴、壊れた洗濯機のガタガタ音など枚挙に暇がない。
　些細な物音でも人によっては騒音と捉えられてしまうこともある。
　引越し当初に自宅の右隣、階下の住人に挨拶しに行った際、箏を弾くことを伝えて快諾されたとはいえ、毎日のように下手な曲が聴こえてきたら嫌気がさしてこないだろうかと、苦情が来ているわけでもないのにヒヤヒヤしていたのに、それを飛び越えて異界に響いて、しかも不協和音

となり魔物達の不快感を募らせるという被害を及ぼしていることを知ると、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。
　私自身が故意で行ったわけではないので責任を感じることはないにしても、無関係な者達が苦しんでいるのなら放置しておけない。
　こてぃすとの修行をして本当に解決するのか不安なところもあった。
　けれども凡人非力の私には他に選択肢がない。それに、怒りや憎しみを秘めたあの時の龍星の冷淡な顔が脳裏に焼き付いて離れなかった。
「そういえば、龍星から聞いたんですけど、龍月のお父さんは今どこに？」
　メルフィーユは視線を落とした。
「彼は……行方不明だ」
「そうなんですか……」
　何故か私はあまり気を落とすことはなかった。
　根拠はないけれど、近いうちに会える気がしてならなかったからだ。
「まずは先生に聞いてみるか」
　私はぐっと伸びをした。

　翌日、先生に何気なく「こてぃすとの練習ってどんなものですか？」と、遠まわしな内容のメールを送ったところ「今度のお稽古の時に教えてあげるわ」としか返ってこなかったので、有無言わさず自動的に実習予約を入れられてしまった。
　あまりにも普通の反応に、免状や資格を試験に臨むのと同じようにレッスンが行われるのではないかという疑念がわいてきた。
　もしかしたら、行く行くは私が「こてぃすとになりたい」と言い出すのを、先生は予見できていたのかもしれない。
　お稽古日、演奏会曲のレッスン終了後、私はこてぃすとの講座を受けることになった。
　普段練習するのと全く同じ箏を目の前にして、最も疑問だったことを先生に尋ねた。
「箏技使う時って、こんな大きい物を抱えながらするんですか？」
「まさか！そんなわけないわよ」
　先生は笑って首を横に振った。
「そりゃ、お箏が手元にあるにこしたことはないけど、いつでもそういうわけにはいかないからね。お箏が近い場所にあれば技の適用範囲だから、ほぼ百パーセントの力を発揮できるの。愛着あるものほど効果は覿面ね。お箏を持ち歩きできない代わりに、お爪だけは必ず持っておくの。そうすればそれなりの技は出せるわよ。試しに絃鳴らしてみる？」
「絃を鳴らす？」
「そう、こうやって……」
　ジャラララン！
　先生は中指で絃を手前から奥へ弾き流した。

細かな金箔がひらひらと箏から舞い上がった。
「わあ〜！キラキラ！」
感動していた私に先生は、
「上手くいくとこうなるの。あなたもやってみて」
早速無茶振りを要求した。
私は拒否できず右手中指を一の絃に置き、十三本目の巾の絃まで一気に弾き流した。
ジャラララ、ラン
「あ、詰まった…」
引っかかりが悪くて、十一番目の絃の斗あたりで詰まってしまった。
「途中まで良かったのに。もう一回」
「はい……」
ジャラララン
今度はスムーズに弾けた。しかし先生の表情は渋いままだった。
「中指が寝すぎてるわ。もっと立てて。あと全部の音の間隔を揃えて」
「ええと……はい」
私は齟齬しながら中指の第一関節をくっと曲げて、十三音をもう一度弾き切った。
ジャラララン！
「えっ？」
ふわふわと舞い上がった金粉に私は目を見張った。
ただ単に絃を一音ずつ高い音に向かって弾き流すだけの複雑でもない奏法。
練習中何となしに絃をジャラジャラかき鳴らすことがあったから、無意識のうちに形だけは箏技にはまっていたのかもしれない。
それゆえに先生の指すポイントをさっぱり掴めていなかったが、彼女は先ほどとはうって変わってニコニコしていた。
「初めてで七音ってすごいわ」
「七音？」
「そう、今のが基本ね。全部の音を一から巾まで均等に流すのが『ソロリン』、相手の技を吸収できるの。反対に巾から一に流すのが『カラリン』で、跳ね返す反射の力が働くのよ。弾き方は簡単だけど音と音のバランス、間隔、音質が良くないとできないし、それ以前に調弦が狂ってたらどんなに上手く弾けてても意味ないわね」
「む、難しいですね……」
「そうよ、難しいわよ。でも琴音ちゃんならできるわよ」
出た！先生の「褒めて伸ばす作戦」
この言い回しにめっぽう弱い私だったが悪い気はしなかった。
「指の形、音の間隔を覚えれば、楽器が近くにない場合でも使えるようになるわ」
「こうやるだけで技が出るんですか？」

私は先生の真似をして宙で右指三本を「おいでおいで」と動かした。
「そうそう。要は良い音をイメージすることよ」
先生の三本の指からはまたキラキラと眩い光が浮かんでいた。これぞマジックフィンガー。
「あと六本出るように頑張って！」
「あ……でも、家で練習するときは一人じゃ判断できへんのですけど」
「ワラビちゃんに頼めばいいじゃない。箏の精霊だし、あのコもわかるはずよ」
「はあ……」
私は練習風景を想像した。
ワラビのことだから、きっと正解でも「それ」とぶっきらぼうに顎で指し示すだけなんだろうと思うとやりきれない気もした——と文句を垂れていても仕方がない。
そのイメージが先生にも伝わったのか彼女は笑みを浮かべた。
「細かい技は他にもいくつかあるけど、まずはこの『守り』が基本よ」
「守りってことは攻めもあるんですか？」
「そうねえ……攻めの箏技は、何かをしかけるわけじゃなくて、いつものように曲を弾けばいいのよ」
「えっ？それだけでいいんですか？」
それなら箏を習っている人全員が攻め技を会得できるのではないか。
「ちょっと言い方悪かったかしらねえ。いつもの演奏以上に神経を集中させないダメなのよ。音で心を鎮めて気持ちを和らげるのが目的だから」
「演奏者が落ち着いてないとアカンってことですね」
「その通り。聴き手の立場になって自分の心もオープンにすること」
「う〜ん……例えば、友達が落ち込んでる時に、元気になってほしいって思いながら心こめて明るい曲弾いたら、相手はすっかり元気になったっていうような感じですか？」
「うん。その逆じゃなければいいわよ」
「逆って、元気を無くさせることですか？」
「そうね……人の弱みにつけこみ更に貶めることかな」
その台詞を聞いた瞬間「魔物」という単語が浮かび上がった。
私は不意に先生の顔をじっと見つめてしまった。
「先生は魔界や魔物をご存知なんですか？」
「ええ」
「天界や使いのことも……？」
先生は縦に頷いた。
「あなたの生まれのこともね」
「そうやったんですか。それでこてぃすとを勧められてたんですね」
「それは別よ。素質があるんじゃないかなと思って」
「え……じゃあ、私の弾いてる音が魔界で雑音になってるっていう事態は……？」

「何それ？」
　ここでも「もちろんよ」という答えを期待していた私は気が抜けてしまった。
　先生は何でもお見通しだと思っていたが、完璧な超能力者ではなかったようで安心した。
「でも、なんで私の中に使いの魂が宿っていることを知っていたんですか？」
「ここー、二年くらい、ふとした時に琴音ちゃんが別人に見える時があったのよ」
「別人？」
「なんとなくよ。私の友達に元使いっていう子がいてねえ、その子と同じ雰囲気がしたからあなたもそうなのかなと思ったのよ」
「異世界の住人って意外と身近にいるものなんですね」
　魔物と使いが結ばれるくらいだから、人間と使いあるいは、人間と魔物の夫婦もどこかでひっそりと暮らしている可能性もあった。
　私の中には使いと魔物の子の魂が存在するとえど、私自身にだって先祖を遡っていけば、魔物や使いの血が混ざっているかもしれない。
　突拍子もない考えだが、私が正真正銘生粋の人間であるとは誰も証明しきれなかった。
　私は先生に、元彼と別れてから箏の音色が魔界では騒音騒動になっていて、龍月の兄である龍星やその他の魔物に追われていることを一通り説明した。
「まあ、誰が聞いても生みの親が悪いって言うでしょうねえ」
　先生はさして驚くふうでもなく溜息をついたかと思うとニヤリと笑んだ。
「練習熱心なあなたのことだから、普通に練習してるよりも、対峙する相手がいる方がやる気湧いてくるでしょ」
「え？いや〜演奏だけならともかく、命の危機を感じてますから……」
「大丈夫よ、あなたなら」
　根拠はない「大丈夫」の一言なのに、先生が発すると安心感と説得感が増す言葉だった。
　おそらく、私の箏への思いを理解されているのと、余計な不安を抱かせない配慮であろう。
　やると決めたからには、せめて事態が収束するまではきちんと取り組まねばならない。

　こうして、ひとまず箏技の基礎を習った私には、翌日からワラビのスパルタレッスンが待ち受けていた。
「私に頼らなくても、輝かなければ間違いと一目瞭然だ」
　早速終わらせようとしていた彼に、
「いや、待って！」
　レッスンを請い願い出た私。
　彼は渋々箏の横に伏せて「一日十分だけ」と制限時間付きで見てくれることになった。
　この貴重な十分間に私は箏技習得への全精力を注いだ。
「そこ、指が曲がっている」
　ぴしっ！と右手にトラパンチ。

「そこ、内側に寄り過ぎている」
　ぴしっ！とまた右手にトラパンチ。
「そこ、音が汚い」
　ぴしっ！と今度は右腕にトラパンチ。
　ジャラララン～と絃を繰り返し鳴らす度に、ワラビの猫パンチならぬトラパンチが入った。
　決して本気で叩いているわけではないので痛くはないのだが、あまりにも俊敏すぎる動きが滑稽でたまらなかった。
　そんな表情を見せようものならプライドの高いワラビのこと、間違いなく静かに激怒し、今後一切稽古をつけてくれなくなることは目に見えていたため、唇を噛みしめ必死に耐えた。

　そんなこんなで迎えた週末。
　ズボンのポケットの中にはきちんと爪をしのばせてある。いつ何時襲撃を受けるかわからないので、職場では雁野さんと利根さんが席を外している時には常に爪箱の中身を確認していた。
（一、二、三……うん、三つきちんと揃ってる、よし！）
　こんな擦り切れて欠けた爪を盗むなど箏奏者でもいないとわかっていながら、万が一に備えスムーズに取り出せるように、出し入れのイメージトレーニングを行っていた。
　爪箱をポケットに戻すと部屋の扉が開いた。
「失礼します～！」
　意気揚々とした声に顔を上げると歩智が入ってきた。
　頭のてっぺんの毛が二、三本立っていた。
「弦葉さん！リストアップしてきましたよ！」
　彼女は嬉しそうに私の隣に来ると、携帯電話をさっと目の前に差し出した。
「リストアップ……？ああ、こないだのか」
　私は彼氏募集なぞ記憶の片隅に追いやっていたことを思い出した。
（良さそうな人いたら紹介して～とか言うたな。にしても、えらい早いなあ）
「四人いるんですけど、この中から好きな人選んで下さい！」
（好きなって、おらんだらどうするん……）
　喉元まで出かけそうになった台詞を飲み込んだ。
　この浮かれ顔からすると、相当張り切って探してくれたのだろう。であれば利根さんのせいとはいえ、紹介を拒否しなかった手前無下に扱うことはできなかった。
「いつまで？」
「あ～え～と、昼休みくらいまでやと助かります」
　彼女はポリポリと頭を掻いた。
　腕時計を見ると十二時二十五分だった。
（あと三十分で決めろっていうんか）
「……じゃあ、今決めるわ」

人生の伴侶が決まるわけでもないし、フィーリングで気の合いそうな人がいるかどうか確かめた。

一. 年齢二十七歳、職業…金融関係、趣味…読書、散歩、ネットサーフィン、性格…真面目、おとなしい

二. 年齢二十八歳、職業…販売関係、趣味…旅行、カフェ巡り、ショッピング、性格…明るい、呑気

三. 年齢二十九歳、職業…医療関係、趣味…散歩、音楽鑑賞、性格…穏やか、気さく

四. 年齢三十歳、職業…ＩＴ関係、趣味…ゲーム、ドライブ　性格…優しい、頼れる

あまりにも端的にまとめられたプロフィールに私は吹き出しそうになった。

一の人は趣味性格ともに内向的すぎて私とかぶるから却下、二の人は私が苦手なおしゃれ男子っぽくて私が暗めやから疲れそう、四の人は性格が優しいか…自称「優しい」男はどうも信用ならない。となると残った三番か。

この少ない情報だけではどれもピンとこなかったが、せっかくリストアップしてきてくれたので、交際にまでは発展しなくても友好な関係を結べそうな人を選んだ。

「三番の人かな」

私は歩智に電話を返した。

「わかりました！この人にメール送るようにしときますね」

歩智は右手でオーケーサインを作ると満足そうに目を細めた。

「うん、ありがとう」

「では、楽しみに待っててくださいねっ！」

「は〜い」

歩智は用件が終わるとそそくさと退出していった。

あの気合いの入りようは何だったのか。若さゆえか――といっても私とは一歳しか変わらないのに。

私はしばらくポカンとしていたが、気を取り直して荷物置き場へお弁当を取りに行った。

久しぶりに仕事が予定通りに終わると清々しい気分になる。

スケジューリングってやっぱり大事、うん！とひとり悦に入りながら嵐山に向かって自転車をこいでいると、前方に何やら人だかりができていた。

野次馬根性のない私はいつもなら素通りするのだが、今日は時間的に余裕もあったので少し前まで進み、歩道の脇に自転車を止めて斜め後ろを振り返った。

「わあ、可愛い〜」

下校中と思しき女子高校生三人、買い物帰りのおばあさん二人に囲まれていたのは一匹の黒猫。グリーンのくりっとした瞳が愛らしかった。

猫は若い女子達に頭や喉を撫でられて極楽極楽、幸せそうに「ふにゃ〜」と鳴いていた。

私も和やかな気持ちで眺めているとパチリと猫と目が合った。

　すると猫はニタリと笑った。
（ん？笑った？）
　反射的に自転車のハンドルを握った私。
　すると黒猫は、撫でる女子達の手を払い除け、
「ここにいたニャン！見つけたニャン！」
　と鼻にかかる声を上げ、空高く飛び上がった。
「きゃ〜っ！」
　急降下してきた猫に女子高校生達とおばあさんは悲鳴を上げ、一斉にその場から逃げ出した。
　黒猫は彼女達には構わず私目がけて向かってきた。
（ひゃああ〜っ！）
　私は咄嗟に前のコンビニの駐車場まで逃げ込んだ。
　その後ろで「ドンッ！」という衝撃音がした。
　恐る恐る振り返ってみると、街路樹の銀杏の幹の中央辺りがパンチでも食らったかのようにへこんでいた。
「もう逃げられないのニャン！覚悟するニャン！」
　地面に降り立った黒猫は威嚇体勢で私を睨みつけていた。
　自己紹介はされていないが、私を狙っていることから魔物であることは推測できた。
　それにしても、この「ニャン」という語尾がやる気を削ぐというか、気落ちさせる要素には間違いなかった。
（どどど、どうしよう……箏技使えるんかな）
　私はポケットの中に手を入れ爪箱を取り出したものの、実際に技が効くかどうか確信が持てずおどおどしていた。
　基本の箏技は相手が何かしてこない限りこちらからは攻撃できない、いわばカウンター的な技しか備えていなかったので、向こうが攻撃してきても私の能力が劣る場合、あの銀杏の木のようにまともに衝撃を受けてやられることはありありと見てとれた。
（これはどう見ても対等じゃないんじゃ……？）
　渦巻く疑問に自問している間にも相手は徐々に距離を詰めていた。
　尻尾がキラリと光った。
（針か）
　ポンコツ人間製造針を奴は器用に尻尾で掴んでいた。
「ちょっとチクっとするだけニャ。我慢するのニャ」
（その一刺しが人生を大きく左右するんや！）
　心の中で叫んだ私に、
「爪をはめろ」
　背後から声がした。
「ワラビ？」

前方を見やるといつのまにか「人乗りサイズ」になったワラビが座っていた。
私は彼の言う通りに慌てて爪をはめた。
「ニャ〜ッ！精霊か！邪魔をするならオマエも消すニャ！」
毛を逆立て爪をむき出しにしている黒猫に対し、ワラビは沈着冷静だった。
「早くこのウザい猫を始末してやれ」
「ウザいって……」
確かにワラビが嫌いそうなタイプの生き物とはわかる。
ニャーニャーうるさい猫ではあるが、悪の手先としては少々役不足というか、ワラビに貫録がありすぎるために黒猫が余計小さく見えてしまっていた。
「ごちゃごちゃうるさいニャン！」
逆上した黒猫が再び飛びかかろうとするとワラビが私に指示した。
「カラリンだ！」
「カラリンやな！……あれ？カラリンって手前からやったけ？奥からやったっけ？ええい！どっちでもいいや！」
私は右腕を正面に出し黒猫に向かって、箏の絃を手前から奥に弾き流す真似をした。
「バカ！反対だ」
「あっ！ごめん！」
ワラビにガンを飛ばされ、すぐさま手を奥から手前に流す仕草に変更した。
ふわりと風が吹き、黒猫はくるりと宙でひっくり返った。
「ニャッ？う、動けないニャ！」
逆立ち状態で手足をバタバタさせていた奴は、
「しょうがないニャ！」
尻尾をぶんと振りまわした。
銀の針は空中を舞うも小さすぎて位置が掴めなかった。
頭上にキラリと光沢感が放れた途端、パキリと針が折れる音がした。
「誰ニャ！？」
その視線の先、歩道には仮の姿のメルフィーユが立っていた。
「ジャマな使いめ！おまえも一緒に消すニャ！」
「その言い方はないやろ！」
私は思わず叫んだ。
猛烈に苛立ちを覚えてしまったからである。
「うるさい奴らニャ！」
黒猫はあんぐりと口を開けた。
身構えた私に今度は、
「カラリン」
余計な事は一切口にせず的確に指示するワラビ。

私は今度は間違えずに手を動かした。それと同時に黒猫の口から炎が吐き出された。
「熱っつい！」
タイミングよく炎を跳ね返ることができたが、壁が薄かったために熱は完全に防ぎきれなかった。
黒猫といえば、自身の炎を器用に身体を反らせてかわした。
「悪くはないな」
「今の出来がってこと？」
ワラビは少しだけ表情を緩めた。
実践でお褒めの言葉をいただけるとは何たる光栄…と感激している暇はなく、習ってまだ一週間も経っていないせいか、体力的にも精神的にもそろそろ参ってきた。
「ここは任せて」
その様子を察してか、私の目の前にさっとメルフィーユが出た。
彼は狂気に満ちた黒猫にも臆することなく、むしろいつも以上に涼やかな顔で身のこなしも軽やかだった。
「そろそろ諦めたらどうかな？三対一っていうのは気が進まない」
「我を見くびらないでほしいニャン！」
追い込まれた黒猫はもう万策尽きてしまったのか凄まじい形相で駆け出した。
そして奴がメルフィーユに体当たりしようとした瞬間、彼はすっと右手を前に出した。
「ニャーッ！！」
不可視光線でも浴びせられたのか黒猫は顔を前脚で覆うとその場に伏した。
奴はよろめきながら体を起こすと、
「うう……退散ニャ！」
そそくさと逃げ去っていってしまった。
「今、何があったん？」
「見えなかったのか」
ワラビの不審そうな口調に私は頷いた。
「使いの特殊能力だよ」
メルフィーユは私が理解できるように端的に言った。
特殊能力とは便利な言葉だ。きっと私がもっとレベルアップすれば、ワラビの言う「見えなかったか」も見えると思ったのでここでは深く追及しなかった。
「あいたっ」
緊張の糸が解けると右腕に痛みが走った。
先ほどの炎を防ぎきれなかった際、軽く火傷をしたようで少し赤く腫れていた。
「大丈夫？見せてごらん」
メルフィーユはぐいっと私の右腕を引き寄せると火傷部分に右手を添えた。
「冷たい……」

冷凍庫を開けた時の冷気のようなひんやり感が伝わり、赤みがみるみるうちに消えてもとの肌色に戻った。

魔法使い並になんでもできる使いに感心した私は目をパチクリさせるばかりだった。

「ありがとうございます」

「ううん。来るのがもう少し早ければ、怖い目にも遭っていなかっただろうから」

彼は伏し目がちになった。

「いえいえ！ワラビがついててくれたので何とか対処できました。間に合ってよかったです」

「実戦で力がつくものだからな」

ワラビが最もなコメントをくれた。

「そう言ってもらえると助かるよ。ありがとう」

ふっと微笑んだ表情に私は何故かドキドキしてしまった。

恋とか愛とかそういう色めきたったものではなく、持っていても当たり前の純粋な好意の念みたいなものを感じ取ったのだ。

私達が傍目も気にせずに駐車場で和んでいると歩道から、

「弦葉さん？」

聞き覚えのある声がかかった。

「ななしろまさん！」

アイボリーのダウンジャケットにネイビーチェック柄のマフラー。

防寒対策ばっちりのななしろまさんが立ち止まっていた。私は小走りで彼の元まで行った。

「撮影備品の買い出しに行くところなんだよ。何かあったみたいだね」

彼は駐車場の隅に立っている一人と一匹を見やると何かに気付いた。

「あれ……あの人、弦葉さんの知り合い？」

「メルフィーユさんですか？」

「やっぱり」

「知ってるんですか？」

私は彼とメルフィーユを交互に見た。

「うちの会社は天界と繋がりある人が多いんだね……」

「他にも誰か？」

「歩智だよ。ちょうど一年くらい前に天界が絡んだ事件があったんだ。使いどうしの喧嘩っていうのかな。エコの神様が持っている幸運になれる運っていうのが歩智に入ってしまって、それを巡って彼と他の使い達とで衝突したらしい。なんとか解決したけど彼は確か謹慎処分を受けたはず……神の許可がない限りは地上に降りられないってことだよ」

ななしろまさんは私が尋ねたいことも交えて説明してくれた。

「へえ〜でも、あの人にはいつも助けてもらってます。その……私の中には使いと魔物の間に生まれた子の魂が宿っているそうで、使いのお父さんが捧げた『祈り』の力によって、私自身が幸せじゃないと、私が弾く箏の音色が魔界では騒音になって被害を受けるそうです」

「それで奴らは弦葉さんを消そうとしてるのか」
「頭の回転速いですね～」
　さすがスマート系男子だ。
　というのはともかく、地味系女子の私、盛髪すべすべお肌のお兄さん、ブチ模様の目つきの鋭いトラという摩訶不思議なトリオは、芝居やマジックショーなど非日常的な現場でしかお目にかかれない異様な雰囲気を醸し出していたものだから、現実では起こり得ない、つまり「命を狙われている」ことも導き出されるのだろうと思った。
　しかし、ななしろまさんは先程の戦闘場面には遭遇していないので、その結論に達するのは全事象を捉えられていないと把握できないものであり、彼はやはり賢くデキる人だった。
　とそのうちに通りがかりの女子高校生やおばさん、おじさん達がぞろぞろ歩道に集まり、私達を如何わしそうに見つめていた。
　決して怪しい者ではありません！怪しく見えるのは主にこの二人だけで、私とななしろまさんはいたって普通の人間です……と狼狽えていると、母親と手を繋いで歩いていた幼稚園児くらいの女の子がぴたりと足を止めた。
「わ～！お母さん、おっきなネコがいるよ～！」
「みーちゃん、あれはトラっていうのよ～」
　母親は間延びした声ですかさず間違いを訂正した。
　赤いほっぺの女の子は首を傾げた。
「トラってどうぶつえんにいないの？」
「あれはね～サーカスで芸をするからあそこにトラがいるのよ～」
「へえ～そうなんだあ～！」
「さあ、行きましょうね～」
　親子は何事もなかったかのように目の前を通り過ぎた。
　辺りに屯していたギャラリーのおばさんやおじさんたちも、
「サーカスか！頑張ってな！」
「寒いで気をつけるんやで！」
　私達にエールを送って立ち去った。
「あ、ありがとございます……」
　正確にいえばトラを使うというよりも、トラに命令されて私が使われていたという方が正しかったのだが、とにかく大事にならなくて済んでほっとした。
「無事に解決してよかったね」
「今日は……まあ」
　有耶無耶にしている私の感情を読み取ったのかななしろまさんは、
「細かいことは聞かないけど無理はしないでね」
「はい。ななしろまさんも気を付けて下さい」
「うん、ありがと」

私の適当な返答に彼は笑顔で頷いた。
「じゃ、そろそろ行くね。お疲れ様」
「お疲れ様でした〜」
くるりと方向転換した彼は駅に向かって行った。
私はメルフィーユとワラビの所へ戻った。
「わけわからん猫やったなあ……」
「この近くにも魔穴があるね」
「これらの魔穴は龍星が故意に作ったものだろう」
「故意にってことはうちの行動を予想して？」
「そうだね……」
メルフィーユは小さく答えた。
「あの猫くらいならまだいいけど、もっと強烈なのが現れたら……」
「魔物は無差別に人間を襲うわけではない。しかし早くケリをつけないと周囲に危害が及ぶ」
「ケリをつけるって？こないだの魔窟に行くの？」
「奴らはお前が箏を弾くのを止めないと知った。ならば後は消すのみ。さっきの猫(ザコ)は魔窟におびき寄せるための手段だろう」
「要するに、うちが早く龍星と会わんと他の人もあの木みたいになってしまうってこと……？」
私は黒猫がへこませた銀杏の木を指差した。
「遅かれ早かれ、龍星や紗佐は再び現れる」
「でも、まだうちには対抗できる力がない」
「だから毎日鍛えてやっているんだろう」
ワラビは語気を強めた。
「そりゃあ、少しずつはレベルアップできてるかもしれへんけど……そもそも、生活してる中で悲しみや怒りが沸かん時ってほんのわずかじゃないん？もし、今龍星に会ったとしても負の感情に押し切られるだけや……」
「それは…」
とメルフィーユが何か言いかけたが、私はいたたまれない気持ちになり、
「ゴメン、先帰ります……」
二人の顔も見ずに自転車に乗るとかっ飛ばした。

天界のお父さんも酷なことをするものだ。
一度記憶された感情は人の心からそう簡単には消えない。楽しい記憶が積み重ねられていっても悲しみに上書きされることはなかった。
見慣れた景色が目に映る度、回想にふけってしまう。別に見たくもないのに、思い出したくもないのに。長い年月を共に過ごしてきた相手というだけに落胆が激しかったのだ。
蘇ってくる数々の厄介な思い出に涙するのはもう嫌だった。

だからそんな心配をする必要のない地に引っ越した。
見るもの全てが初めて、新鮮で新たなスタートにはふさわしい場所……と思っていたのに山を眺めているだけで心が痛くなった。
これが「辛い」という感情なのだろうか。いくら切ろうとしても切れない、忘れられない。
「ふう……」
少々飛ばしすぎたせいかいつもより十分ほど早く家に着いた。
が、頭がふらふらですぐに水分補給したかった。
先に帰ると言っておきながら部屋のドアを開けると、ワラビがちょこんと元のサイズでお座りしていた。
「お帰り」
「……ただいま」
普段滅多に出迎えてくれない彼が珍しく自ら話しかけた。
「今日は疲れたから休む」
いつもの「こてぃすと十分間特訓講座」の休講を告げた彼は、箏の裏側の音穴に潜り込んだ。
（気を遣わせてるなあ……不甲斐ない主人でごめんよ）
私は絃に沿ってそっと箏を撫でた。
コンコンコン
ベランダの窓を軽く叩く音。
三階の高さの窓ガラスを叩けるのは、根気強い大胆な泥棒以外は一人しか知らなかった。
私はカーテンが閉まったままの窓に向かって、
「どうぞ……って鍵開いてないや」
足早に窓際へ行った。
ベランダに立っていたのは使いの姿をしたメルフィーユだった。
戸を開けて彼を招き入れた私は彼に謝った。
「すみません……感情的になってしまって」
「そんなことないよ。急なことばかりで、君には無理をさせてしまってる」
彼はきまりが悪そうに部屋の角の壁にもたれかかった。
その斜め前に私は体育座りをした。
「人間を巻き込むなんて行い止められればいいんだけど、消すまでは執念深く追うのが魔物だから……」
「消す、か」
今まで「死ね」や「殺す」のほうが恐ろしいと感じていたが、ここ最近は「消す」も同等かそれ以上に恐怖の言葉に変化しつつあった。
「大丈夫？」
スッと壁から身体を離したメルフィーユは膝立ちになり、私の顔を覗き込んだ。
全てを見透かしてしまう碧く澄んだ瞳に私はドキリとしたが笑おうと努めた。

「ううん、何にも……！」
　首を左右に振るとポタリと一粒の涙が零れ落ちた。
　私は慌てて右手で拭ったが視界は歪んでいた。
「これだけ『消す』ばっかり言われてると、うちって本当は不要な存在なんかなあと思って」
　心の奥底からわっと込み上げてくる思いが、今にも溢れ出そうで我慢できなかった。
「お父さんが来てくれへんのも、きっとうちを厄介者と思ってるからや。祈りさえなかったら平和に暮らせてたのに……何でこんなふうにしたん？」
　これは龍月の本音なのか、私の思いなのか判断できなかった。
　それに、彼に問うても答えが返ってこないことなど分かっていた。
　しかし、どんなに事情を理性で論理的に考え理解しているつもりでも、素直な思いを閉じ込めたままにはしておけなかった。
「うわぁ〜ん！」
　私は色んな気持ちがごちゃまぜになって泣いた。
　元彼と別れて七ヶ月、泣き尽くして涙もとうに枯れてしまったと思っていたのに、滂沱たる涙がとめどなく流れていた。化粧が崩れてどろどろの顔になっていても構わなかった。
「泣かないで……」
　かろうじて右目を開けると彼がポンと私の頭に手を置いた。
「この世に要らない存在なんかないんだよ。魔物にとっては厄介かもしれないけれど、君自身を否定しているわけじゃない。お父さんも君のこと傍で見守ってるよ」
「は、はい……」
　何かを言おうとしたが、鼻が詰まって更に不細工な面を晒すのは嫌だったので、うんうんと頷いた。
　答えを求めていたわけではない。ただ知ってほしかっただけだ。自分の素直な気持ちを。
　と、ふわりと温かいものに覆われた。見上げると彼が私の肩をぎゅっと抱きしめてくれていた。
　甘すぎず柔らかで優雅なフローラルの香りが漂う。
　なんだろうこの安堵感は……私は腕を広げてばっと彼に抱きついた。
　彼は少し驚いたようだったが、にっこり微笑むと優しく私の頭を撫でてくれた。
　心地良さのあまりすうっと身体の力が抜け、暫く微睡んでいた。

　翌土曜日、私はあてもなく嵐山観光地付近をぶらぶら歩いていた。
　川を結ぶ橋が三途の川の掛け橋のようで、春夏は花や葉が生い茂り華やかな桜並木も冬の曇り空の下では、木々の枝があの世に招く無数の手に見えて不気味さが増していた。
　国内有数の観光地だけに流石に観光客はゼロではなく、数名のカップルも見受けられた。
　こんな冬眠中の風景が広がっていても、だいたい若いカップル達は「紅葉してないけど、こんな雰囲気も風情があっていいね〜」とかいちゃつきながら、ちんたらして橋の上を歩いているのだ。

彼女は内心「なんかイマイチかも」と感じていたとしても、大好きな彼氏との待ちに待ったデート、ギクシャクするような発言で気まずくなるのは困るから、とりあえず「風情がある」と言っておけば、それなりに満喫していると彼氏にも同感してもらえるだろうと思う。

その感想を聞いた彼氏はといえば、ムードをぶち壊さないために「そうだねえ」と適当に相槌を打ち、違和感はあるけどわざわざ衝突することはない――穏便に済ませてめでたしめでたし……な結果になるとは限らない。

人間の付き合いとはそんな薄っぺらいもので良いのか！と勝手な妄想で憤慨していると、ショルダーバッグ中のケータイが震えた。

手袋を外してケータイを取り出すと、フタには「堀田恭子」という文字が表示されていた。

「もしもし～」

「琴音ちゃん？久しぶり！」

「久しぶり～！ってどうしたん？電話なんて珍しい」

声の主は大学時代からの友人のポッキーこと堀田恭子だった。

同じ箏曲部に所属し、休みの日にはよく遊びに出掛けたりもしていたのだが、社会人になってからは多忙のためかめっきりメールも少なくなり、声を聞いたのは半年ぶりである。

「いや～元気かなと思ってさ」

「んまあ、なんとか元気にやってるよ。まだたまに昔のこと思い返す時もあるけど」

「しばらくはそれでいいんちゃう？引きずってるのはアカンけど」

ポッキーは軽いノリだった。

彼女には私が元彼と別れたことを何かの折に知らせていた。

「ポッキーは最近どう？」

「あたしはええ感じやで。去年は仕事忙しくてストレスめっちゃ溜まってたんやけどな。愚痴れる彼氏もおらんだから食べることに走ってえらい太ったんよ。で、このままじゃあかんと思い立って、朝ちょっと早めに起きて家のまわり散歩するようになったんよ。近所のおばちゃんでウォーキングしてる人がいてな、今ではすっかり仲良しなってさ。他愛もないこと話してお互いよう笑てるわ」

「へえ～」

どちらかというと引きこもりがちなポッキーにとって、早起きしての散歩はよほど斬新だったのだろう。

声質も生き生きとしていた。

「そんなんやから毎日が楽しくなって。琴音ちゃんも一人で簡単にできることしてみたらええと思うよ。あ、箏あるから打ち込めるものはいらんかもしれやんけど」

「ううん、この頃は何かにつけて動いてるよ。そうしてないと落ちつかんからな」

「そうやね。でも、何かに直向きになってる姿ってやっぱり惹かれるよ。あたしはもう箏全然触ってないけど、ずっと続けてる琴音ちゃん見ると自分も頑張らなって思うし」

「……もっと実用的なことやったらええんやけど」

私は少々引け目を感じた。
「内容より持続するってのが大事やで。そりゃ直接何かに役立つってわけではないけど、箏の音色聞くとホッとするし、癒されるし……弾く人の真剣さっていうのかな、箏を介してその人の思いが伝わってくる気がするねん。琴音ちゃんはフリートーク苦手やろから箏はぴったりやと思うで」
彼女はくすくすと笑った。
「ぴったりかどうかはわからんけど、自然に弾きたい！ってなるなあ」
「それが大事やって。社会人になると仕事以外打ち込めるものありません！ていう人多いからな〜特に男の人なんて。誰かに言われてじゃなくて、自分でやりたいからできてることって早々ないんやで。まして、箏って楽器なんかは珍しいし立派な特技やん。琴音ちゃんにはずっと続けてほしいなって思ってる」
「ポッキーもたまには弾いてあげなよ」
私の意地悪な返事に彼女は、
「……えっと、和室に立てっぱのままやけど。いつか……いつかヒマがあったら弾くわ」
だんだんと声が小さくなっていた。
「とにかく！箏でもいいし、一人になった機会にあれこれしてみたらええやん」
仕切り直したポッキーの声は明るかった。
「ありがと。ポッキーがいてくれて良かったわ」
「そんなお世辞言うても何も出てこうへんで。琴音ちゃんがちょっとでも元気なってくれたら嬉しいわ」
「ポッキーにはいつも助けられてるからな。今度嵐山遊びにおいでよ」
「そやね。桜と紅葉の季節しか行ったことないけど、冬のが落ちついてよさげやな。また空いてる日メールするわ」
「うん、待ってる」
「それじゃ、身体気つけてな」
「ポッキーも風邪ひかんようにな」
「バイバ〜イ」
電源を切ってケータイのフタをパタンと閉じた。
私の心の靄は幾分か薄くなっていた。
ポッキーとは頻繁に連絡を取っているわけでもないが、声を聞けばいつでも気軽に話すことができる。濃い学生時代を一緒に過ごした仲間だからこそ、離れていても心の結びつきは深いまま「つかずはなれず」ほどよい距離感を保てているのだと思う。
私はぐっと右手を握りしめた。思い立ったらすぐに実践、有言実行だ。

翌日から早速日中の散歩を試みることにした私。
河原沿いに並ぶ桜、その他名も知らぬ木々——

この何気ない風景を眺めていると今の自分が小さく思えてきた。

私が成功しようが失敗しようが、勝とうが負けようが、他に及ぼす影響は微々たるもの。

人生を左右しかねない選択でも、宇宙全体で見ればほんのわずかな瞬間でしかない。

その瞬間の「一瞬」しか生きられない人間はとてつもなく無力で脆弱だ。

私に他の子供の魂がくっついているからといって、一人の人間ができることなどたかが知れている。能力をはるかに超えた事態を解決しようなんていうのが間違いなのだ。

何だか開き直ってしまったけれども、難しく考えすぎたらだめなのだ。完璧でない愚かな存在だからこそ、「やり直し」がきくのだろう。

私は思い切り仰け反った。

（空はこんなにも広かったんか……）

数ヶ月ぶりに空をしっかり見上げたように思う。

東の空にはすでに白い月が顔を出している。雲といえる雲はなく、白い羽根のような物体が無造作に筋状に流れているだけだった。

雲のない空は寒かったが、混じりけのない空気を吸い込むと心が洗われていくようだった。

私は前向きに生きているとばかり信じ込んでいたが、それは単なる思い込みで狭い世界しか見られていなかった。

（やるだけやってみよう）

一切の迷いを振り切った私は走ってマンションへ戻った。

十五分後、荒んだ風景の中、私とワラビは並んで聳え立つ山々を眺めていた。

部屋に帰った後ワラビに「襲撃されるばかりじゃ埒があかんから」と伝えて再び外に出ようとしたら、「無謀な行動はやめろ」と一旦は引き留められたものの、彼も同行するという条件で今こうして生い茂る薄の中に佇んでいた。

ひゅるる〜と冷たい風が吹き付け、木の枝がサワサワとしなっていた。

誰も通りかからないせいで余計に寒く感じられた。

私の勘が正しければ、このあたりに魔窟があるはずだった。

リン――とかすかな鈴の音がした。誘導していると思われる音は河原の草地の方へこだましていた。

（あの中かな）

私は道路を渡り、薄や草花が生えている窪地へと向かった。

まだ昼過ぎだというのに空はどんより曇っていて、花も葉もない桜の木々が恨めしそうだった。

（魔窟はどこにあるんやろう……）

薄畑の中を歩きながら私はピタリと足を止めた。

背中に凍てつく視線が突き刺さったからだ。

（まさか！）

私は背後を振り返った。

「状況がよく呑み込めていない顔だな」

侮蔑したような態度の龍星にヒヤリとした。
（ここは魔窟じゃないのに……）
先ほどと何も変わらぬ殺風景な景色が広がっているだけ。
それなのに何故彼が平然としていられるのか理解できなかった。
いや、違う。同じ景色に見えて実は既に魔窟に足を踏み入れてしまっていたのだ。
「結論は出たのか。辞めるか消えるか」
彼はそこから一歩も動かずに私を見据えていた。
「そのどっちでもない」
「こてぃすととは粋な選択をしたものだな。それでいつまで待たせるつもりだ？」
彼はふんと鼻を鳴らした。
（全部お見通しなんやんか！）
心の中で文句を言いながらも私は挑発する言動は慎んでおいた。
「負の感情は失くせへん。だって、人間誰しも生まれながらにして持ってるものやから。でも減らすことならできる。こてぃすととしてはまだ修行中の身やけど、いつも心穏やかに過ごしたいって思って弾いてる」
「それは人間都合な話だな」
「……元はと言えば、祈りを捧げたお父さんが悪いんやろ」
私は少しイラッとした。
彼が提示した二つの案は魔界贔屓なのだから、人間の私が人間贔屓で考えたっておかしくないはずだ。
「原因がわかっていて、肝心の張本人が傍にいるのに責めないのも不思議だな」
「傍に？お父さんは行方不明やろ」
「お前、父を知らないのか？」
私が頷くと彼は呆れ顔で、
「龍月の父親はメルフィーユだ」
と言った。
「ええっ！？若すぎるやろ」
愕然とする私に彼は蔑むように言いやった。
「使いも歳を取るのが遅いんだよ」
「ああ……なるほど」
灯台下暗しとはこのことか。
これまでの妙なドキドキ感の正体は親子特有の感覚と判明した。
それにしても、自分の子供を見ると連れ戻したくなるから親は迎えに行かないと、自身にも当てはめたのは何故なのか……私の目を誤魔化すためか。正直に話して欲しかったと、私の落胆ぶりを目にした龍星は意地悪く笑った。
「他人のフリをしておけば、子のお前に近付きやすかったんだろう。更にこてぃすとにまで持っ

ていかせるとはたいしたものだ」
「そんな騙してたみたいな……」
「現に父親ってことを隠していただろう」
「う、それは……」
　私は閉口した。
「本当に大切な子供なら、危険な目に遭わせてまで放置しておくか？まあ、所詮それだけの価値だったということだ」
　含み笑いをする龍星に私は嫌悪感を抱いた。
　人の心を弄ぶ彼にも真実を黙っていた父にも、様子見主義かと腹が立ちかけていた。
　その時、ぽんぽんと右足首に柔らかいものが当たった。
「ん？」
　ふと足元を見やるとワラビが私の右足に前脚を乗せていた。
（いつの間に……）
「気にするな。人の価値は他人が決めるものではない。今は自分の思いをぶつければいい」
「ワラビ……」
　彼の言葉を聞いたら刺々しい感情が丸くおさまった。
　口数の少ない彼だが、迷った時は的確なアドバイスを与えてくれる大事なパートナーであり、師匠であり、ペットであり――とにかくかけがえのない存在だ。こうして仲を深められたのは箏という楽器に出会えたからである。
　橘先生やポッキー、職場の人達、そして元彼、全ての人との出会いと別れが影響して今の私が成り立っているのだ。
　ここでメルフィーユを責めたところで仕方ない。規律厳しい天界のことだから、真実は口外せぬよう命令でもされていたのだろう。無関係者としてでも地上界に来てくれたのは、娘を見守らねばと責任感を覚えたからにちがいない。
　とりあえず、今は龍星を何とか説得しなければならなかった。
　そうはいっても私は饒舌ではないし、この非常に危険な状況で何ができるかといえば箏を弾く真似くらいだった。
　泰然自若に構え、自分の信じるものを信じ抜くこと。
　知らなければ、聞かなかったふりをすれば全てが何事もなく平穏無事に過ぎてゆく。
　安心できる存在に依存しすぎると安住してしまい、いつの間にか夢が叶ったという幻想を抱いていた。
　それまで自分が続けていたことが十分にできなくても、相手の喜ぶ顔が見られたら幸せだと思い込んでいた。だから元彼に「別の道を進みたい」と言われた時ショックだった。裏切られたと感じた。
　私は我慢しているのに、なんであなたは私を放ってまで自由にできるの？と。
　今思い返せば、私が理想を求めすぎていたのかもしれない。

これだけ頑張っていれば相手も応えてくれると思っていたが、好きな相手の為に尽くすことだけが幸せではなかった。それは私にとってものすごく悲しい事実だけれども、決して不幸になったわけではない。

彼と別れて悟ったことはたくさんある。

別れを無駄にしないためにもというのは半分建前だが、一人でも強く生きていけるようになりたいと感じられるようになった。

それまで彼だけに注がれていたものが、木々や川、草花、空、雲…あらゆる自然に移ったことで私の世界観がまた変わりつつあった。

見えなくても日に日に世界は少しずつ変化していっている。

「音は弾く人の心を表す」という。

魔界の仕組みが地上界と違うとしても、私の心の持ちようが変われば音だって変わってくるはずだ。

いつだったか利根さんが言っていたように、人の不幸よりも幸せを願える人間でありたい。

偽善者のように聞こえるかもしれないが、こう思って生きている方がツキが回ってきやすい……いや、そんな損得じゃなしに人としての喜びを感じたい。

きっと自分にしかできない役目がある。私にならきっとできる。箏を弾くという方法なら――

それが今の私ができる最善の策だ。

「箏はうちにとってかけがえのないもの……しょぼい演奏しかできへんけど、うちにだって箏弾きとしてのプライドはあるよ。それをすぐに失うなんてできへん」

正直な思いを吐露しても、冷酷な魔物は納得しないであろうことは目に見えていた。しかしここで弾くのを辞めるなどと嘘をついても辛くなるだけで、更に悲しみが深くなるばかりだ。

私の必死の訴えにも龍星は動じず、

「折り合いがつかないな」

と呟くとパチンと指を鳴らした。

周囲がみるみるうちに真っ黒に溶け出し、この間の洋風の居間が現れた。

彼は壁際に控えていた紗佐から何かを受け取った。この数日間で何度目にしたことだろう。地上界の使いが恐れる銀の針だ。

こんな物騒な物をどこの誰が拵えたのか……などと切羽詰まっている状況に限って、余計な好奇心が芽生えてくる。

彼が投げて私に刺さりさえすればジ・エンドなのに。そうしない素振りからすると、きっと別のもっと効率的な方法で攻めてくると読んだ。

ふにゅっと私の右足が踏んだワラビが囁いた

「よく聞け。あいつが何かしよとしたら右手でカラリンだ。跳ね返し続けるんだ」

「うん」

手早く箏爪を装着した私は身構えた。

（来る！）

私は腕を手前から奥に弾いた。
ぶわっと風が吹き、針は跳ね返された。
ドン！
「ワラビ！」
それと同時に長い髪の毛がワラビを捕え壁に押し付けた。
「しばらく大人しくしててちょうだい」
ワラビはじたばたするが髪の毛はびくともしなかった。
（くそう……！）
私は歯を食いしばった。
「力の差があるのは歴然だろう。お前にはこの針は折れない」
「そんなことない！」
飛んできた針に向かってもう一度カラリン。
ぽんと跳ね返ったが何と上手い具合に龍星の手の平に乗ってしまった。
（カラリンのアホぉ～！）
更に体力消耗した私は足元がふらついた。
そこを狙ってか彼は私の後ろをとると首にぐっと腕を回した。
首筋から数センチというところに針の先端があった。
「最期にも立ち会わないとはな。哀れなものだ。」
「哀れ？」
「父親にも見放され愛する男にも捨てられ、拠り所がないまま生きることは苦しいだろう」
「それは……」
「人は好意ある者には愛されたいと思う。そして自らもその意になんとか応えようとしたがる。けれども結局負担が重荷に変わり自滅する」
龍星は訝しげな口調だった。
彼の言うこともあながち嘘ではない。さすがは魔物、心の闇に巣食っているのだ。
でも私はもう迷いたくない。一筋に思い描いた通りの人生などない。どうにもしようがないことだらけなのが生きる道だとわかったから。
「つい最近まではそう思ってた。けど、誰かに認められたいからじゃなくて、自分が信じたいから信じてるだけなんや。期待に応えてくれたら嬉しいなって思う。それはあくまでも自分の視点。本当にわかりあうって求めてばかりじゃなくて、素直に自分をさらけ出すことなんやって」
彼を説得させるつもりが、まるで自分自身に言い聞かせているようだった。
元彼に全愛情を注いでいた私。母を救うために躍起になっていた龍星。
世界も状況も異なるが何かの為に一心だったのは変わらない。一生懸命すぎて知らぬ間に自分に負担がかかっていたのだ。
私は半ば希うように龍星を見上げた。
彼は躊躇いと諦めがまざった表情だった。

「そうか……何を言っても無駄だったな」
　彼が腕を大きく振り上げると私は咄嗟に右腕を下ろし、親指を反らせて後ろから前へ掻いた。
「何！？」
　ぶわっと突風が吹いて龍星は部屋の隅まで飛ばされた。
　私は百八十度方向転換した。
　銀の針が空中をふよふよと舞っているかと思ったら、龍星が飛び上がってキャッチした。
（あ……！）
　彼は標的を私に狙いを定めた。
　ぎゅっと目をつぶった私は咄嗟に叫んだ。
「お父さん！」
　パアッと白い光が差し込み、目が眩んだ龍星は的を外した。
　トン…と針が床に落ちた。
　入口の扉を見やるとメルフィーユが本来の姿で佇んでいた。愁いを帯びた瞳だった。
「やっとお出ましか」
　目を開けた龍星は筋書き通りというふうに彼を睨んだ。
「龍星の言うてることは本当ですか？」
「うん、そうだよ。黙っていてごめん……」
「……」
　私は怒りや悲しみとは違った別の感情が出かけたが、どう表現してよいのか迷っていると、メルフィーユは小さく呟いた。
「あの時、地上界へ魂を送ることに未練があったんだ……」
「未練？」
「できることならずっと天界で親子一緒に暮らしたかった」
「それはできへんだって。他に手段がなかったんやったら仕方ない……」
　彼は首を横に振った。
「異なる世界で生まれた子供はどの世界でも暮らせる適応能力があると言ったけれど、僕達の場合はそうはいかなかった……」
　彼は言いづらそうに視線を逸らした。
　やや間があってから、
「こいつは魔穴に生まれたんだよ」
　と口にしたのは龍星だった。
「魔穴って、昔の戦いで天界に残ってる穴やろ？何の問題が？」
　狼狽する私にメルフィーユが徐ろに口を開いた。
「魔穴はその効力は失ったものの、天界では最も暗く冷たい所。魔物が潜んでいるわけでもないのに他の使い達は忌み嫌って誰も寄り付かない。僕の両親が若い頃、神の咎めを受けた際、魔穴に移住せざるを得なかったんだ」

「そんな追放みたいなこと……」
「事実上の追放だろう」
　龍星はフンと鼻を鳴らした。
「人間どもに崇め讃えられている神々は、使いにさんざん人間を正しく導く役目を担わせておきながら異界関係の出処というだけで非難する。品行方正、清廉潔白を掲げているかは知らないが、性質的に多種を受け付けないものなんだろう。そんな高貴な神の使いが魔界のフレリ、それもリーダーであるハナと関係を持っているなど神にバレたら抹消されてもおかしくはない。そうはならなくても、永遠に疎まれる人生を送るハメになるのは決まっている。だからこいつは仕方なくお前を地上界へ遣った。罪なき者まで疎外するとは薄情な奴らばかりだろう？天界は」
　嘲弄する彼にメルフィーユはぎゅっと唇を噛みしめた。
「確かに、天界には不可解な決まり事がいくつも存在する。生い立ちを厭わしく感じたことさえある……でも自分の気持ちに嘘はつけない。龍月には使いとして生きてほしかったという心残りのせいで祈りを捧げることになってしまった」
「結果を予想できていたはずなのにか？」
「神々でさえ未来は予知できない。予測はあっても本人の生き方次第で変わってくるものだから」
「で、騒音被害を出す子供をこてぃすとにして解決させるつもりか？」
「それは彼女の意志だ」
　メルフィーユは横目で私を見た。
　龍星はやれやれと呆れ果てていた。
「親子揃って自己中心的な奴らだな」
　突如、まわりがぐにゃりと黒く歪み始めたのと同時に地面が沈みこんだ。
　沼地に足を踏み入れてしまったかの如く安定感のない足場から、ヘドロに似た茶黒いドロリとした強力な粘着性の物が足にまとわりついた。
　隣にいたメルフィーユは飛ぼうとしたが、ドロドロが羽に絡まりそのまま黒い壁の中へと引きずり込まれてしまった。
「後ろだ！」
　ワラビの声に反応して振り返った時には、壁や地面からドロドロが蔽いかぶさるように迫ってきていた。
　私は頑固な足枷を振り切るように「ふお〜っ！」と全力を振り絞って我武者羅に走った。
　すると急に身体が軽くなった。
「わっ！」
　つんのめって着地した先は仄かな明かりに照らされていた。
　四畳ほどの狭い和室。中央にはぽつんと箏が一面。
　なんでこんなところに……私は不思議に思いながらも自然と箏の前に正座していた。
　調弦を確かめると音程に狂いはなかった。
（弾いてみようかな）

私はおそるおそるポケットの中から爪箱を取り出して爪をはめた。

とりあえず弾き慣れた独奏曲をと思い、かろうじて暗譜していた『栗花落』という曲を弾こうと思い調弦を取り始めた。

栗花落とはちょうど栗の花が落ちる時期、つまり梅雨入りのことを表す。

この曲は一昨年受けた資格試験の自由曲として猛練習した。

第一章は梅雨入りの憂鬱感、第二章は梅雨明けを待ち遠しく思う気持ちを表したスピード感に溢れ、なおかつ繊細さが漂う大変弾きごたえのある曲だ。

絃をすくって鳴らす怒涛のスクイ爪、右手左手を交互で刻む十六分音符のリズム、せわしなく続くオクターブの合わせ爪が難所で繰り返しも多い。

それゆえに、それぞれのフレーズを覚えてしまえば、仕上がりまでに時間はかからなかった。しかし、ただ単に譜面を追うだけでは無味乾燥な曲にしかならない。

上級者たるもの作曲者の意図を汲み取ることはもちろん、演奏者の自分がどのようにして弾き、聴き手に何を伝えたいのかを意識することの重要性を、お稽古に通う中で実感した。

普段とは異なる環境で及び腰になりながらも、私は一音一音丁寧に弾くよう心がけた。

（うん、いつも通り）

ところが数分経つと不自然な音に聞こえ始めた。

調弦が狂ったのかと確かめてみたが、各絃の箏柱の位置を少しずつ調整しただけで、大きなズレは生じていなかった。

私は再び弾き進めた。

（む？もわんって聞こえる……）

ちょうど夕立ち場面の激しい雨の様子を描いた部分で違和感を覚えた。

左手で絃を強く押さえて弾く、押し手が連続するわけでもないのに音がくぐもっていた。

それでもなお弾き続けていると、次第にぐわんぐわんぐわん――と不快な響きが増し、和音もバラバラで不協和音に耐えられず、曲が終わらないうちに手を止めてしまった。

（何なんこれは！？）

私は両耳を塞いだ。

今の状況を例えるなら、のびきったカセットテープに録音後、再生してみたら音程はズレズレ、旋律はべろんべろん、悲鳴に聞こえる高音、地響きのような低音――精神を病んでしまいそうな気味の悪い音楽と化していた。

（魔窟で弾いてるから？）

と思った瞬間寒気がした。

もしや、旋律ですらないこの音が龍星が騒音と表現していたものなのでは……と。

これは酷い。大音量のスピーカーやバイクの暴走音などよりも悪質だ。まだ耳の中で音がわんわん響いている。

こんな下手な演奏を聴かされたら怒り心頭に発するのも無理はない。だからといって箏を弾くことを止めないといけないのか。私にはこてぃすと以前に、表現者として生きる道は向いていな

かったのだろうか……

私はそのまま項垂れた。

（何も見たくない、何も聞きたくない）

だんだん深い闇に吸い込まれていく感覚に包まれた。

リリ、リリリ――

（またこの音……）

のっそりと頭を上げた私。

目覚ましアラームに早変わりした音色は、私に何か訴えかけているようでもあった。

仰け反ると膝の上に置いていた爪がコロンと落ちた。

今まで演奏会や試験という幾多の試練をともに乗り越えてきた相棒。親指の爪は角がとれてだいぶ丸くなっているし、黒い爪輪は何度取り替えてもらったことか。

ボロボロで思い出の詰まった爪を改めて見つめていたら何だか元気が湧いてきた。

今の自分にできることを精一杯やる――それが自分が自分らしく暮らせる唯一の方法。

私にとってはそうではないか。全ての原動力がそこにあるなら、好きなものは好きと自信を持って言いたい。義務じゃなくて「そうしたい」という気持ちを大切にしたい。

私はギュッと目をつぶった。そしてもう一度箏を弾き始めた。

（イメージするんや。うちの目指すところを……！）

私が願うのは全ての人の安らぎ。

澄みきった音には程遠くても、このメロディーが天界や魔界のひとたちの心にも届いてほしい。

気が滅入る雨の日々も終わり、いよいよ夏本番を迎える第二章は、軽快で躍動感に満ちた曲風に様変わりする。

それは今の私の心と繋がっていた。箏を弾ける環境に生きている私は幸せ者なのだと感謝しつつ、優しく明るい気持ちで演奏に専念した。

最後に一と二の絃を中指で同時に鳴らし右手でそっと消した。

微かな余韻が残り、静穏な空間だけが広がっていた。

私はあまりにも落ち着いてしまい、何だかほっこりした気分に包まれた――が、

（そういや、この部屋どう出たらええんやろ）

根本的な問題に気付き爪を外した。

リリリン――

その問いに応えるように再び鈴の音が聞こえてきた。その方向には襖があった。

私は痺れかけた左足をさすりながら立ち上がり襖の前まで進んだ。腹を括って襖を引くと――

シュコン！

そこは元の居間だった。

「あれっ？」

様子は先ほどと若干異なっていた。

部屋の中央には、十代後半から七十歳くらいまでの老若男女合わせて七人がぐるりと紗佐の長

い髪の毛で縛られていた。
「上手く抜けたか」
　龍星は私が無傷で戻ってきたことを確認するとソファから立ち上がった。
「この人達は！？」
「紗佐が捕えてきた。地上で暮らしている使いの子供達だ」
　彼の右手には銀の針がしっかりと握られていた。
「消すつもりなん？」
「条件次第だ」
「条件？」
「お前が消えるならこいつらは解放してやろう。そうでない場合は一斉に始末する」
「その人らは関係ないやんか！」
「じゃあ、お前が消えるか？」
「そ、それは……」
　私は言葉に詰まった。
　我が身はかわいい、それは他人にとっても同じだ。さすがは魔物、卑怯な真似をしてくれる。
　人質達の目は「助けてくれ！あんたのせいなんだからあんたが消えてくれ！」と訴えているようにしか見えなかった。
「さあ、どうする？」
　龍星は彼らににじり寄った。
　私は頭の中がグルグルまわって考えがまとまらなかった。
（いや……でも、あかん、誰も傷つけたくない！）
　もうそれだけの思いで私はダッ！と駆け出し人質達の前に出た。
「覚悟ができたようだな」
　龍星が針を振り下ろした。
　私は無意識に左手に持っていた石を頭上に翳した。
　ポキッ！
　目を開くと針の先端が石に当たり折れていた。偶然か必然か。魔除けの効果がイマイチだった直径四センチの石がここ一番で私を救ってくれたのだ。
　龍星が呆気にとられていた隙に私は彼の手首に噛みついた。
「……っ！」
　針が彼の手から落ちた。
　私がすかさず拾い上げたその刹那、
　ドコォッ！
「痛いっ！！」
　痛烈な腹蹴りをくらった。
「琴音！」

私は針を握りしめたままその場に座り込んだ。
駆けつけたワラビは心配そうな眼差しを向けていた。
「大丈夫か？」
「いててて……なんとか。人生で初めてやわ、お腹蹴られたん。これで針は使えへんよな？」
私はワラビに同意を求めたが、彼はしばし間をあけてから、
「あの女を見てみろ」
と紗佐を見やった。
彼女は何かを龍星に手渡していた。
「針？なんで？三つ折ったはずやのに！」
「下品な猫のはダミーだったようだな」
下品な猫とは職場付近に現れた、語尾に「ニャン」とつけていた黒猫のことだろう。
今思えばあれだけ自分で消すと宣言していた龍星が、見るからに刺客レベルのわけのわからない魔物に任せるわけないとも感じた。
（あ～もう動けやんよう～）
二十代後半を目前にして体力の衰えを痛感した。
二十歳前後の頃の体力があればと思ったが、大学生以降運動という運動をした記憶がない。
精神的には気丈になったものの、デスクワークも多いために、冬は腰痛や冷えに悩まされる典型的な内勤ＯＬ症状まっしぐらだった。
そうやって重たくなった尻を上げないわけにはいかない。希望を見出せる限りは諦めたくない。
龍星を睨んでいると急にパッと人質達の髪縄がほどかれた。
「お前の覚悟を認めてこいつらは助けてやろう」
彼は方向転換し私に近付いてきた。
尻は持ち上がったけれど、右手指三本の関節に痛みが生じた。
無計画かつまだ不慣れな箏技を乱発、更に一曲演奏したせいで私の指は限界に近かった。
「諦めろ。もう何も変わらない」
「変わらん？……この世に変わらんものなんてない。小さすぎて気付いてないだけ。うちもあんたも」
「何を生意気な！」
憤った彼が手を上げようとした瞬間、人質になっていた一人の少年が彼をガシッと羽交い絞めにした。
「放せ！命が惜しくないのか！」
「死にたくないけど、この人が死ぬのも見たくない！」
「逆らうのならお前から消す！」
龍星は足を後ろに蹴りあげて少年を突き放した。
ドン！と絨毯の上に転んだ少年に、龍星は針を刺そうと腕を高く振りかざした。
その刹那、辺りを白い光が包んだ。

少年の前に現れたのはメルフィーユだった。
無事で良かったとほっとしたのも束の間、龍星はターンしてジャンプすると私の目の前に着地した。
すっかり油断していた私は右手の指を曲げようとしたが、あまりの痛さでできなかった。
「もう止めるんだ！父親が違うとはいえ君達は兄妹(きょうだい)だろう！」
メルフィーユは私を庇った。
「自分の子供を捨てた奴に言えることなのか？それに、知性と美貌のカケラもない妹など要らない」
「ちょっ……！それはどうにもできやんやろ！」
ブチ切れ寸前になった私は龍星の嫌味に激しく抗議した。
「強ち間違いではないがな」
独りごちたワラビを見逃さなかった。
しかし私は反論できるほどの知性を持ち合わせていなかった。
「知的美人だけが良いんじゃない！大事なのは中身。人生なんて心の持ちようで何とでも変わってくる！」
勢いとはいえ大それたことを口走ってしまった。
ここまで来たらもう退けない。
大切なものを守るためなら死ねるとまでは豪語できない。でもその気持ちがあるのに見過ごすなんて、良心というものが存在するのなら許せなかった。
自分の身体と心なのに、まるで別の誰かが入っていて、私を導くかのような感覚におそわれていた。
「正直こんなに手間取るとは思ってもみなかった。仕方ない、ここを塞ぐしかないな」
龍星は怒りを抑えふうと溜息をついた。
「せいぜい守ってもらうといい。耐えられればの話だが」
そして龍星と紗佐はともに姿を消した。
その直後、フィイイ～ンと不吉な音がして周囲が歪み始めた。
（え、何！？）
私は急に不安になり傍にいたワラビにしがみついた。
「魔窟をまるごと消すつもりだ」
「早く逃げやんと！」
「それはできない。魔窟に入口はあっても出口はない。魔物が消えれば一時的に魔窟も消える」
「もしかして、それと同時にうちらも消えるの？」
「そうなるな……」
ワラビは俯いた。
「ごめん、結局守り切れなかった」
メルフィーユの心苦しそうな顔に過去の記憶が蘇った。

ずっと一緒にいられんでごめん――あの時の元彼の悲愴な表情。

もうどうしようもないことなのか？元彼は自分の意志でそう決めたことだ。でも今の状況は違う。もっと生きたいと、幸せに暮らしたいと願っている生き物が少なくとも二人と一匹はいるのだから。

私はメルフィーユの手を取ってぎゅっと握りしめた。

「その台詞はまだ早いよ」

何故か顔が綻んだ。

絶体絶命の危機に陥っているのに心に余裕があった。誰かが私に「大丈夫」と伝えているのだ。

私は平静さを保てていたものの、まわりはどんどん崩れ落ち、それらがぐるぐるとかき混ぜられるようにして出来上がった混濁した渦が、存在するもの全てを飲み込もうとしていた。

メルフィーユは羽をふわりと広げて私とワラビを覆ってくれた。おかげで強風と轟音が遮られ幾分か楽になったが、渦の中心は確実に威力を増していた。

あの黒渦は魔界と繋がっているのだろうか――

なんてことをぼんやり考えているうちに渦が目前まで迫ってきていた。

ところが風も渦も音も次第に勢力を弱めやがて消えてしまった。

辺りは初めに訪れた通りの洋風居間の風景が広がっているだけだった。

ガチャ――

扉が開く音がして一人の背の高い女性が中に入ってきた。

見た目は四十代前半くらい、ウェーブがかった黒髪に深い碧の瞳。

その凛とした佇まいに私はしばし見惚れていた。

「今だ早く！」

人質になっていた使い達は彼女と入れ替わりで扉から外へ脱出していった。

「美弥(みや)……」

メルフィーユは目を丸くしていた。

「え？」

私は彼と“美弥”と呼ばれた女性を交互に見比べた。

「久しぶりだね。龍月もこんなに大きくなって……」

懐かしそうに目を細める彼女。

私はハッと口に手を当てた。

「もしかして、龍月のお母さん！？」

彼女はこくりと頷いた。

魔界のエリートと聞いていたから、イメージではもっとキツくて毒々しい人柄だったが、それとは正反対といって良いほど、淑やかで柔らかい印象の人だった。

「どうしてここに……」

メルフィーユが問いかけようとすると、

「母さん！？」

部屋の隅から叫ぶ声がした。
母親の気配を察知したのか、龍星はすぐさま美弥の元へ駆け寄った。
「龍星、あなたには心配をかけたね」
美弥は彼の頭をそっと撫でた。
「でも、兄妹で争うなんて悲しいことだよ」
「だけど母さんは奴のせいで……！」
「違うよ」
彼女は静かに、はっきりと否定した。
その発言には場にいた全員の動作がぴたりと止まった。美弥はゆっくりと話し始めた。
「私が動けなくなったのは、メルフィーユが龍月を地上界に送った時、その反動の受け皿になったからだよ」
「受け皿？」
「私はメルフィーユが祈りを捧げたことは知ってた。だから地上界で祈りが暴走しそうになった場合は私に返すようにと、受け皿になる魔法をかけたんだ」
「ってことは、美弥さんが病気になったっていうのは音色のせいじゃなくて、反動のせいやったっていうこと？」
「そう……それでも私一人では防ぎきれなかったから、魔界にも被害が及んでしまったの」
「す、すみません……」
「あなたが謝ることじゃないよ。私達の判断が甘かっただけ」
「いや、君こそ悪くない。どうしても離れたくなかったとはいえ、安易に祈りを捧げた僕の責任だ」
メルフィーユは申し訳なさそうだったが美弥は首を傾げた。
「そうかな……こうして私が目覚めたのは、彼女の心の穴が満たされてきたからなんだよ」
「えっ？」
「さっきの音色には迷いが一切なかった」
「あの薄暗い場所で弾いてた時？」
「あの空間は、あなたの心の中を映し出していたんだよ」
「うちの心？あんなに狭くて暗くて寂しかったんか……」
私は荒んだ気持ちになりかけると、彼女はにっこり微笑んだ。
「そんな気持ちは人間なら誰にでもあるの。心の中のどこあってどれだけ占めているのか、そのバランスは時々に変わるものなの。あなたの闇の部分に現れた箏。それは希望と同じ。あなたは自分で気付いて闇から抜け出したんだよ」
「鈴の音色が聞こえてました。ずっと前から」
「それは私が鳴らしてた。あなたが闇に閉じ込められそうになっても迷わないように」
「そうやったんですか…」
私は不思議と驚かなかった。

「あと、あれは鈴じゃなくて箏の音色だよ」
「箏！？」
「龍星が生まれる数年前のことになるけど、私が若かった頃、地上界のどこからか綺麗な音色が聞こえてきたの。そのあまりにも繊細で澄んだ音に惹かれてこっそり地上界に赴くと、一人の人間が箏を弾いていたんだ。彼女は『こてぃすと』と名乗った。木々の精霊を鎮める曲だったらしいけど、魔物まで魅了するほどに琴線に触れる音色だったんだね」
　と、柔和な笑顔を見せる彼女は慈愛に満ちていた。
「そこで箏が龍に見立てられた楽器と教えてもらって、何て高尚なんだろうって感じたの。だからあなた達にも『強く輝いて生きてほしい』という願いを込めて名前を付けたんだよ。龍月が箏に出会うなんて全く予想してなかったけどね」
「それじゃあ、本当に偶然が重なった出来事？」
「偶然か必然かは感じ方次第。地上界で暮らしていても、魂には彼の『祈り』がきちんと込められていたってことだけは言えるよ。幸せって形にはないもの。どんなに辛い時でも、行く先を見失わなければ別の幸せを見つけられる。彼のこめた祈りはそれだったんだよ」
「……でも、これからも弾き続けてたら、騒音被害は収まらんのじゃ……いつもいつも心が安定してるわけじゃないし……っていうか、むしろ不安定な方が多いから」
　私は言い淀んだ。
　こてぃすとの卵すらなれていない身なのに、今後もあの歪んだ音が魔界に響き渡ると思うとぞっとした。
「悲しい、辛いっていう気持ちが悪いわけじゃないんだよ。それらも大事な感情のうち。沸き起こった感情に流されずに、立ち直ろうと前向きであれば魔物は寄ってこないの。それに、仮に一時の怒りに我を忘れてしまっても私がいるから大丈夫だよ」
　華奢だけれど全てを包みこんでくれそうな、まるで天界の使いに近い清らかな笑顔に私の悩みはぶっ飛んだ。
　私は黙っている龍星をなんとなしに見やった。母の無事に安堵し戦意喪失しても良いはずなのに、彼は相変わらず私を小馬鹿にするような視線を送っていた。
「私の言ったこと忘れたの？」
「ああ……妹に会うことがあったら温かく迎え入れろ、ってやつか」
　美弥の問いに彼は多少面倒くさそうに答えた。
「全然温かいおもてなしじゃなかったよ。初めて会った瞬間首絞められるし、今さっきは腹蹴られるし、暴力的な兄やわ」
　私は思い切り皮肉ってやった。
　引っぱたきたいくらいですと罵りたくなったが、母を前にしてはさすがに控えておいた。
「大人しく刺されていれば蹴らなかった」
　とまあ彼は悪びれる様子もなく、反対に神経を逆なでする発言をした。
（イケメンやからって調子に乗りやがって！）

と、相手を無駄に怒らせる労力すら勿体ないと思った私は大人しく口を閉じておいた。
私達の大人げない会話を聞いていた美弥とメルフィーユは、互いに顔を見合わせて呆れ果てていた。
「人間が魔界に長居するのは体に良くないよ。早く戻りましょう」
美弥が平和的に解決しようとしていると龍星が遮った。
「ここで和解したとしても、俺達の役目が変わるわけじゃない」
「役目？」
「魔物達は人間の弱い心に付け入る元来の習性ともう一つ、フレリには地上界に住み着く使いを天界に返す任務がある」
（背いたら消されかねへんって言うてたな。あれ？地上界の使いってことはもしや……）
「その標的の中にはうちも含まれてたりする？」
恐る恐る尋ねると龍星は、
「さあな。事情を知らない奴らは狙ってくるだろうな」
サラリと答えた。
「どうした？怖気づいたか？」
彼は不敵な笑みを浮かべた。
「ち、違うよ！」
私は声を張った。
「こてぃすとの特訓したるよ！あんたの思惑通りにはさせへんで！」
私も兄に対して優しさのカケラもない発言をしてしまった。
「そこまでしなくても……美弥に任せておけば、他の魔物達が君を狙うことはないから」
メルフィーユは今回のような事件に私を巻き込みたくなかったのだろう。
その親心はひしひしと感じられた。けれども兄にここまでコケにされたら突き進むしかなかった。
「自分や大切な人を守ってみせます」
「いいの？一生こてぃすとして生きていかなければならないかもしれないんだよ？」
メルフィーユはものすごく止めたそうだったが、私は彼をまっすぐ見据えた。
「一生をかける価値があります」
「琴音……」
「うちの中の龍月もそう促してる気が……いや、反対してるかな」
私は苦笑した。
「今まで予め決まってる選択肢を選んで生きてきました。『幸せ』ってとこからヒモがのびてて、その道たどれば絶対に幸せになれるんやって。でも決まってることなんて、運命なんてないってわかったんです」
同棲中は「幸せ」の絶頂だったかもしれない。悔しいけれどその事実は認めるしかない。
ただ、その幸せ＝ゴールではなかった。若い二人には未来なんか確立しておらず、ずっと一緒

に暮らせたらいいなあとなんとなくぼんやりとした予想図しか描けていなかったのだ。
「どこに誰との間に生まれるかとか、自分の意志が関与してない所はどうにもならんけど、こうやって生きてるうちは自由。うちが箏に出会えたのも、こてぃすと目指そうとしてるんも、もしかしたら必然的なことかもしれへんけど、やからってうちの中の何が変わるわけでもない。うちが好きやから、やりたいから続けてるだけ。それでもっと多くの人に伝われればと思って弾いてるだけ……っていうと自己中な感じもしますけど」
　アハハハとため息と笑いが混ざった声が出た。
「強い思いがあるのなら止めないよ」
　メルフィーユは優しく微笑んだ。
「ありがとうございます」
「さすがに一人きりにするのは心配だから、ワラビには力を与えたままにしておくよ。ワラビ頼んだよ」
　ワラビはゆっくり瞬きをしてから、
「……努力する」
　と曖昧に返事した。
（お世話かけますなあ、ワラビさん。今度大トロを食べさせてあげるから！って精霊は何も食べへんやないの）
　餌で釣るよりも、私が早く一人前になってワラビ離れすることが彼にとっての最高のお返しにちがいなかった。
　ちょっぴり寂しいけれどまだまだ先のこと。ぼちぼち進めていこうじゃないか。
　一大決心をしたにも関わらず私の心は晴れやかだった。
「俺はまだ許したわけじゃないからな」
　ふくれっ面の龍星の正面に立った美弥は「こらっ！」と彼にデコピンをかました。
「いたっ！」
　彼は左手で額を押さえた。
「私を助けようとしてくれてたのは嬉しいけど、まわりが見えなくなってちゃだめだよ。誰が何が悪いかなんて複雑に絡まってるものなんだから『この人だけが！』って決めつけないの。あなたはまだそういうところが未熟だよ」
　ピシッと人差し指を立てた厳しい顔の彼女に龍星は一瞬私を睨んだが、ぐっと堪えたかと思うとしょんぼりした。母強し。
「そんなに落ち込まないの！」
「べ、別に落ち込んでなんかない……」
　彼は慌てて顔をあげたが明らかに狼狽していた。
　この二人は親子というか姉弟みたいだ。となると私がまざると三兄弟姉妹になるのか……と悠長なことを考えられるほどに場の空気は和んでいた。
「何笑ってるんだよ」

「え？そう？いや、何も……」
　龍星が美弥に窘められている姿を見て思わず顔がにやけていたらしい。
　私は包み隠さず仕返しのつもりで、くふふふふと笑ってやった。
（かわいい妹を蹴った罰じゃ～！）
　私の心も時にひねくれる。
「この子はこう見えて寂しがり屋だから、あまり苛めないであげてね」
「ほどほどにします」
「だから笑うな！」
　龍星は美弥の言うことには反論せず私にばかり怒っていた。
　母には頭が上がらないのだろう。強力な味方をつけた私にはもう彼に恐怖感はなかった。彼には失礼だが、困ったりムキになったりする姿を見てむしろ親近感を覚え始めてしまったくらいだ。
「似たものどうしだな」
　ワラビが呆れていた。
「うちとこの人が？」
　彼は否定しなかった。
　う～ん、私にはさっぱりわからない。容姿も全然違うし、冷淡でもないし……強いて一つ挙げるとするなら、出会うタイミングがなんとなくわかることくらいか。
　そういうのは「似たもの」とは少し違う気もするが、ワラビは人間には理解できぬ意味不明なことをたまに言う癖があるので詳しく聞かなかった。
「じゃあ、今度こそ本当に……」
　美弥は言いかけると目が潤んだ。
「もう会えないんですか？」
「そう思っていた方が良いかもしれないね。使いと違って私達は人間にとったら闇の部分。隠れるべきものだから」
「そっか……」
　今日初めて会ったばかりなのに別れを意識した途端、心の奥の方から切ない気持ちがじわじわとにじみ出てきた。
　龍月は寂しがっているのだと感じた。頬に涙が伝った。
「あ……あれ？何でやろ？」
　私は片手で涙を拭った。
　悲しくないのに涙が出てきた。美弥がぎゅっと私を抱きしめた。
「ごめんね、龍月」
　そのやわらかな温もりに私は癒された。
　龍月が天界あるいは魔界で暮らしていたらどんな姿をしていたのだろう。
　この二人の子供だから珠のように輝やんばかりの女の子に育っていたかもしれない。
　もう「弦葉琴音」として生きているから目にすることはないけれど、ここ数日は何故か彼女の

意思を感じる時があった。
　龍月にはわかっていたのかもしれない。彼女の分まで頑張らないと……と思うと荷が重い。
　重くてもいい、これから軽くしていけばよいのだ。
「龍月もきっと喜んでます」
　その途端すっと肩の力が抜けた。
　母に会えて思いを伝えられたのだろうか。
「龍月はあなたの中に生き続けてる。見えないけれどこれからもきっと力になってくれるよ」
「はい」
　私は明るく返事した。
「この扉を出れば地上界に帰れるよ。元気でね」
「ありがとうございます」
　ペコリとお辞儀をした私は、不貞腐れている龍星を尻目にメルフィーユに向き直った。
「本当に申し訳なかった……」
「ううん、うちも龍月もメルフィーユさんのこと全然恨んでないです。魔界の人たちには悪いことしたけど、その分もっと良い音色で弾けるように修行せなって気付けたので。ありがたいっていうと変やけど……うん、でも、ありがとうございました」
　彼はゆっくりと顔を綻ばせた。
「僕は君達を誇りに思うよ」
（えへへへ〜よかったなあ龍月。これからも頼りないうちをどうぞよろしく……って聞こえてるかな）
　私は心の中で龍月に呼びかけた。
「仕方ない人間ねえ」という声が返ってきそうだった。
　別れの挨拶が済んだ私とワラビは扉の方へ歩いて行った。
　ドアノブに手をかけてから、
「メルフィーユさんは帰らないんですか？」
　と思い出した。
「僕はもうしばらく彼女と話していくことがあるから……」
「ここでお別れなんですね」
　永久の別れではないのに離れることを実感すると寂しくなってきた。
　私の心情を察してか彼は私の頭を軽く叩いた。
「君は自分が思っている以上に強い子だから大丈夫！」
「そうだよ。私達はいつでも見守ってるよ」
　美弥も励ましてくれた。
「ワラビもいるし……うん、そうですね！」
　私は元気を取り戻した。
　私は一人じゃない。自分だけが不幸という被害妄想は金輪際止めよう。

強く誓った私はきゅっと口角を上げた。
「本当にありがとうございました。帰り……じゃなくて、行ってきます！」
「いってらっしゃい！」
温かい笑顔に見送られて私は扉を押した。

時刻はお昼の十二時二分。
やっとお昼！とワクワクしてきた頃だった。
部屋の扉が開いてななしろまさんが入ってきた。彼は私の傍まで来ると、
「はい、これどうぞ」
机にインナーケースをそっと置いた。
先日彼が写真撮影をしていた商品サンプルの箱だ。
「え？もろていいんですか？」
私は慌てて尋ねた。
「その約束だったからね」
「ありがとうございます！」
「大事に使ってね」
彼は爽やかに回答しスマートに去っていった。
ふわっとした笑顔に癒された私はとてもあったかい気持ちになっていた。
「あ、照れてる〜」
「さて、お昼にするか」
からかう利根さんの声が聞こえたが全力でスルーした。
「うわっ、ひどっ！無視された」
「無視じゃなくてシカトです」
「どっちも変わらんわい！」
こんな二人のしょうもないやりとりを傍で眺めていた雁野さんは、
「昼早よ行かな混むで」
席から立ち上がった。
利根さんはそれにつられて、
「は〜い、じゃあ行ってきま〜す」
コートを着ると私に腹当たりして扉に向かった。
「いてっ！百倍にして返しますよ」
「あ〜こわこわ」
利根さんは足早に部屋を出て行った。
（何て平和なんやろう。彼氏なんかおらんでも生きてけるんちゃうん〜オトコよりオコト、なーんちゃって）
連日の騒動があってからどこかネジが外れてしまったのか、心の中はすっかり陽気になってい

た。

　はははははは……はあ。そしてやっぱり溜息。

　箏が恋人はもうこの先ないだろうなあと感じた。

　こてぃすと修行は頑張るが、一日中そればかりというのも疲れるし、好きなことに疲れるのは快感だけれども、フレッシュな二十代生活を満喫できていないというか……ああ、もう、キレイ事はよろし！喜びを分かち合える恋人が欲しい！のだ本音は。

　一人地団太を踏んでいると机の上の携帯電話がブルルと震えた。

　新着メールが一通届いていた。

（誰やろ？）

　ボタンを押すと見知らぬメルアドの表示。件名には「こんにちは」の後にニッコリ絵文字。

　とりあえず本文を読んでみた。

「はじめまして。珠崎さんから紹介された凛堂仁達（りんどうにんたつ）といいます。弦葉さんはお箏が趣味だそうですね。古風で奥ゆかしい方なんやろなあと感じました。箏の魅力はどんなところですか？これからどうぞよろしくお願いします」

　歩智の彼氏候補リストから選んだ一人からのメールだった。

（こ、古風、奥ゆかしい……）

　私は思わず声を上げて大笑いしそうになった。

　この内容を利根さんに見られたらどんなに揶揄されるか。

　知り合うきっかけとして、箏の大和撫子イメージは悪くないなと思った。

　相手にとったら「騙された！」とがっかりさせることになるかもしれないが、その時は本人の思いこみだと切り返してやればいい。

　返信は勤務が終わって落ち着いてからすることにし、電話のフタを閉じた。

（上手くいくといいなあ……）

　少し前向きに少し後ろ向きに。

　心に素直になってみると視野がまた一つ広がる。

　私は多分寂しがり屋だ。だからいつでも誰かを求めてしまう。わかってくれる人を。

　それが私という人間なのだ。自分をさらけ出すにも自信がないと到底無理。

　そのためにも自分磨き！こてぃすと修行に本気で励まねば…

　私はいつも閉まったままの窓のブラインドを上げた。

　サーッと陽が強く差し込んだ。空は驚くほどに澄み切っていた。

（完）